ISSN 2432-2849

名古屋大学国際機構

国際言語センター 年　報

第4号

目 次

巻頭言……大室　剛志　1

実践報告

・国際シンポジウム「日本語教育実践の過程と成果の可視化に向けた記述的試み
——単位の互換性、比較可能性を目指して——」……衣川　隆生　5

・平成28年度公開講座「日本語学習支援を始めよう !! 日本語パートナー講座」……衣川　隆生　8

活動報告

・FD 活動の報告 ……俵山　雄司　13

・第74・75期（2016年）日本語研修コース ……衣川　隆生　14

・第35期　上級日本語特別コース（2015年10月～2016年9月）……籾山　洋介　16

・全学向日本語プログラム　2016年度 ……李　澤熊　19

・学部留学生を対象とする言語文化科目「日本語」 ……浮葉　正親　24

・短期留学生日本語プログラム　2016年度 ……石﨑　俊子　28

・第17期　日韓理工系学部予備教育コース ……俵山　雄司　31

・日本語教育メディア・システムの開発 ……石﨑　俊子・佐藤　弘毅　33

資料 …… 35

巻頭言

「ごあいさつ」

国際言語センター長

大　室　剛　志

2017年４月１日に，初代国際言語センター長の福田真人先生の後を継いで２代目として就任した大室剛志と申します。これから宜しくお願い申し上げます。２代目というと，国際言語センターは随分と新しい組織なのかと思われるかもしれませんが，そうではありません。国際言語センターの前組織である留学センターは，1993年４月に発足していて，そこには，初代馬越徹先生から町田健先生までの７代のセンター長がおられ，通算すると私で９代目ということになります。名古屋大学の留学生に，自らの研究を通して，日本語・日本文化を教育するという重要な職務が長期に渡り遂行されて来ているわけです。

私達の国際言語センターは，現在，日本語･日本文化教育部門と英語教育部門の２つの部門から成っています。日本語・日本文化教育部門のミッションは，外国人留学生への日本語教育・日本文化理解教育を提供するとともに，日本語教育のための教材開発，教育法の開発研究を行うことと，インターネットや各種メディアを用いた日本語教育用コンピュータ・ソフトウエアの研究開発・提供を行うことです。名古屋大学外国人留学生は，2016年には，91カ国から合計1,672名でしたが，2017年には，106カ国1,805名とこのわずか１年の間でも，15カ国増え，人数としては133名増し，約7.9％増となっています。2017年の外国人留学生を地域別で見てみると，アジア1,472名（81.6％）と圧倒的に多く，欧州123名（6.8％），アフリカ65名（3.6％），北米48名（2.7％），中南米42名（2.3％），中東39名（2.2％），太平洋16名（0.9％）となっています。出身国トップ10を見ると，中国754名，韓国170名，ベトナム87名，インドネシア83名，台湾45名，アメリカ40名，タイ40名，カンボジア37名，モンゴル37名，マレーシア36名，インド30名です。これら留学生は，学部生であるか，院生であるか，国費か外国政府派遣か私費であるか，経歴の点，現在のステイタス，宗教の点など実に様々です。グローバル化が叫ばれる昨今，ますます留学生の数とその多様性は今後も増え続けるに違いありません。これは私達国際言語センターにとっては，そのミッションからしても，嬉しいことではありますが，また一方で，その職務の重要性が増大していることも意味し，今後，増々気を引き締めていかなければなりません。

こういった多様な留学生に日本語・日本文化を教育するにあたって国際言語センターの先生は，日頃研究に邁進し，その研究成果を留学生に還元しようと常に努力しています。専門領域となると日本語教育はもちろんですが，日本語学，認知言語学，一般言語学，日本語 CALL 教材開発，日本語教育工学，文化人類学に及んでいます。つまり，留学生に実りのある教育を施すには，単に，日本語の初級，中級教育をし，G30の外国人日本語初級者に教育をしていればいいというものではなく，その背後の基盤をなす言語や言語文化に関する人文学的研究を怠りなく行っていなければなりません。その点で，2017年度に文学研究科と国際言語文化研究科と国際開発研究科国際コミュニケーション専攻が合体して新たに発足した大学院人文学研究科の応用日本語学専門を国際言語センターの先生が占めたことは何にもまして喜ばしいことであったと思います。応用日本語学専門において，諸大学からの留学生を含む大学院生の研究指導を行う環境が整い，さらに先生方の研究に拍車がかかることが間違いないわけですから。

なお，英語教育部門は，G30との兼任教員で構成されていますので，特にこの年報には記述がないことをお断りしておきます。

最後に，私事を申して申し訳ありませんが，私は現在人文学研究科英語学専門に所属しながらセンター長を兼任していますが，1986年４月に名古屋大学総合言語センターに赴任しました。そこの応用言語科学部門から私の名大人生は始まりましたが，そこには，当時，水谷修先生をはじめとし，蒼々たる日本語教育の研究者がおられました。私自身，言語文化部時代に日本言

語文化専攻の応用言語学講座でも教鞭をとったこともあり，現在のセンターの先生方とも非常に親しい関係にあります。ある面，30年たって帰って来たなという思いがあります。センターが増々発展するよう，尽力したく思います。

実践報告

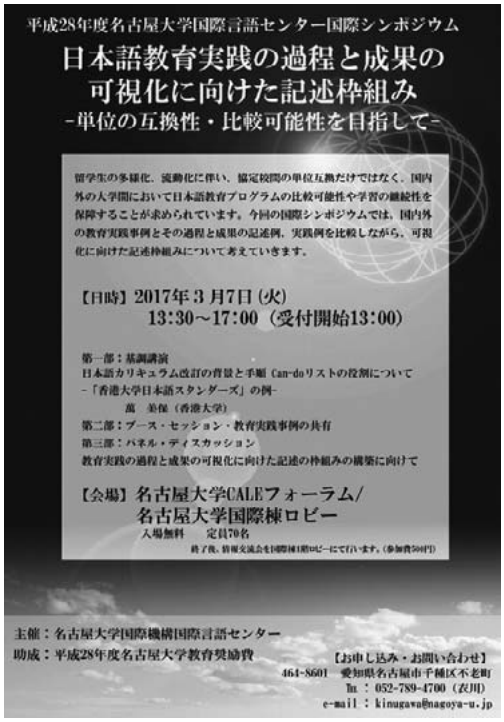
国際シンポジウム

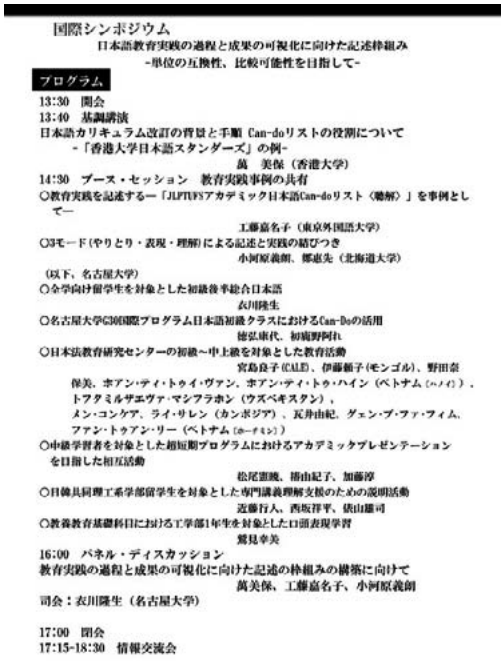
「日本語教育実践の過程と成果の可視化に向けた記述枠組み」
―単位の互換性、比較可能性を目指して―

衣　川　隆　生

1．はじめに

文部科学省が平成26年度に募集を開始した「スーパーグローバル大学創成支援（SGU）」の申請において，名古屋大学は日本語科目の単位の実質化と質の保証を図るため「欧米で標準的になりつつあるCEFRやNational Standards，日本語教育の標準化を目指したJF日本語教育スタンダードとの整合性も取りつつ，高等教育機関の単位付与科目として質的に保証される能力記述と評価方法の確立，及び交流協定校への普及を目指す」ことを目標の一つとしている。この目標の実現のため，平成27年度より，学内で日本語教育，及び日本語教員養成に関わる教員による情報交換会，実践共有会を開催し，それらの活動を通して，日本語教育プログラムの目的，到達目標，内容等を記述する枠組みの検討を開始した。同時に，交流協定に基づいて留学生を送り出している交流協定校を訪問し，学生を名古屋大学に送り出す際の能力記述のあり方，名古屋大学における日本語学習の学習履歴の記述のあり方，帰国後の単位認定の際に利用する能力記述の課題等について情報交換，意見交換も開始した。それらの情報交換，意見交換を行った結果，日本語教育プログラムの目的，到達目標，内容等の記述だけでは担当者間や機関間で解釈にずれが生じることが課題として明らかとなった。そこで，平成28年度においては，教育実践事例，到達目標に達した学生のパフォーマンス，教育実践の過程で使用した素材等を事例として収集し，能力記述と共に示すことで，日本語教育プログラムの到達目標，内容，活動の可視化を図ることを試みた。本シンポジウムは，新たな到達目標，内容，活動の記述の枠組みに基づいてカリキュラムの再編を行ってきた国内外の事例を学ぶとともに，日本語教育実践の過程と成果の可視化に向けた記述枠組みを議論することを目的に開催されたものである。





国際シンポジウム
日本語教育実践の過程と成果の可視化に向けた記述枠組み
-単位の互換性、比較可能性を目指して-

プログラム

13:30　開会
13:40　基調講演
日本語カリキュラム改訂の背景と手順 Can-doリストの役割について
-「香港大学日本語スタンダーズ」の例-
萬　美保（香港大学）
14:30　ブース・セッション　教育実践事例の共有
○教育実践を記述する―「JLPT/JFスアカデミック日本語Can-doリスト〈聴解〉」を事例として―
工藤嘉名子（東京外国語大学）
○3モード（やりとり・表現・理解）による記述と実践の結びつき
小河原義朗、郷恵先（北海道大学）
（以下、名古屋大学）
○全学向け留学生を対象とした初級後半総合日本語
衣川隆生
○名古屋大学GGI国際プログラム日本語初級クラスにおけるCan-Doの活用
徳弘康代、初瀬野阿れ
○日本語教育研究センターの初級～中上級を対象とした教育活動
宮島良子（CALE）、伊藤麻子（モンゴル）、野田奈保美、ホアン・ティ・トゥイ・ヴァン、ホアン・ティ・トゥ・ハイン（ベトナム〔ハノイ〕）、トフタミルザエヴァ・マシフラホン（ウズベキスタン）、メン・コンケア、ライ・サレン（カンボジア）、瓦舟由紀、グェン・ブ・ファ・ティム、ファン・トゥアン・リー（ベトナム〔ホーチミン〕）
○中級学習者を対象とした超短期プログラムにおけるアカデミックプレゼンテーションを目指した相互活動
松尾恵梨、藤由紀子、加藤淳
○日韓共同理工系学部留学生を対象とした専門講義理解支援のための説明活動
近藤行人、西坂洋平、荻山雄司
○教養教育基礎科目における工学部1年生を対象とした口頭表現学習
鷲見幸美
16:00　パネル・ディスカッション
教育実践の過程と成果の可視化に向けた記述の枠組みの構築に向けて
萬美保、工藤嘉名子、小河原義朗
司会：衣川隆生（名古屋大学）

17:00　閉会
17:15-18:30　情報交流会

２．シンポジウム内容

【日　時】平成29年３月７日（火）13:30～17:00（開場13:00）
【会　場】名古屋大学 CALE フォーラム / 名古屋大学国際棟ロビー
【主　催】名古屋大学国際機構国際言語センター
【定　員】70名　参加費無料

シンポジウムは，香港大学萬美保氏による基調講演「日本語カリキュラム改訂の背景と手順 Can-do リストの役割について－『香港大学日本語スタンダーズ』の例－」で幕を開けた。香港大は，毎年複数名の短期交換留学生を名古屋大学に送り出している交流協定校の一つであり，数年前から Can-do リストを使った「香港大学日本語スタンダーズ」を構築し，それに基づいた日本語カリキュラムの見直しを実施している先進的な教育機関の一つである。講演では，まず，Can-do リストを使った「香港大学日本語スタンダーズ」作成の背景要因について説明が行われた。従来の日本語カリキュラムの目標記述には一貫性，明確性において様々な課題があったこと，留学の増加に伴って単位互換，成績認定の際の判定材料にも様々な問題点が存在したことが内部要因としてあり，他国における言語スタンダーズ･ムーブメントの動向，大学の教育方針が Outcome-based teaching and learning（OBTL）となり，教育目標，教育内容の明文化，透明性が求められるようになったことが外在要因としてあったことが「香港大学日本語スタンダーズ」作成の背景にはあった。次に，Outcome-base, Content-base で記述された日本語科目のゴール，技能別，レベル別の Can-do 記述による行動目標の例が示され，その行動目標をどのようなプロセスで作成，改訂してきたかの手順が説明された。最後に「香港大学日本語スタンダーズ」に基づいたカリキュラムを受講した学生，指導した教師，学内の反応について紹介された。

基調講演に引き続き，教育実践事例の共有を目的としたブースセッションが行われた。学外からは北海道大学の小河原義朗氏と鄭惠先氏による「３モード（やりとり・表現・理解）による記述と実践の結びつき」，東京外国語大学の工藤嘉名子氏による「「JLPTUFS アカデミック日本語 Can-do リスト〈聴解〉」を事例として」が出展され，学内からは６つの事例紹介ブースが出展された。

萬美保氏による基調講演

パネル／ディスカッション風景

シンポジウムの最後にはパネル・ディスカッション「教育実践の過程と成果の可視化に向けた記述の枠組みの構築に向けて」が行われた。香港大学の萬美保氏からは「単位互換の判断」と「判断材料として必要なもの」の事例報告があり，それに基づいて「成績や単位の互換の妥当性，信頼性を向上させていくためには，どのような記述枠組みで，どんな根拠資料を共有すればいいのか」という議論のポイントが示され，フロアとのディスカッションが行われた。次に東京外国語大学の工藤嘉名子氏から「『聞いて理解する』の可視化と評価」「『聞いて理解する』と他技能の結びつき」についての事例報告を行われ，それに続いて「聴解，読解，理解等の受容能力の目標，成果はどのような記述枠組みで，どんな根拠資料を共有すればいいのか」という議論のポイントが示され，それについても議論，質疑応答が行われた。最後に北海道大学の小河原義朗氏から「『やりとりモード』『理解モード』『表現モード』という三つのモードによるカリキュラムの記述」につい

ての事例報告が行われ，その報告に基づいて「教育実践の目標と成果を提示する枠組みとして，技能やモードをどのように分類すればいいのか」というポイントでフロアとの議論が行われた。

当日は定員70名を越える来場者を迎え，ブースの出展者や講演者，パネリストと間で活発な情報交換，意見交換が行われた。このシンポジウムを通して国内外の様々な教育実践事例と，その過程と成果の記述方法を共有することができ，今後日本語教育プログラムの標準化を目指した改革を進める際の指針を考えることができる有意義な一日となった。

※本シンポジウムは平成28年度名古屋大学教育奨励費に基づいて開催されたものである。

平成28年度公開講座

「日本語学習支援を始めよう !! 日本語パートナー講座」

衣　川　隆　生

１．はじめに

国際言語センターでは，日本語学習支援ボランティア組織「さくらの会」との共催で平成25年度から公開講座「留学生に対する日本語パートナー講座」を開催してきた。「さくらの会」は，旧留学生センター教員が講師を担当した名古屋市生涯学習センター主催2003年度日本語ボランティア入門講座修了生を中心として2004年４月から活動を継続している日本語学習支援ボランティア組織であり，「日本語で話そう」を合い言葉に現在国際言語センターを中心として週２回活動を行っている。

平成28年度からは，日本語学習支援の対象者を留学生に限定せず，地域に在住，在勤の外国人を対象とした日本語学習支援を取り上げようという趣旨に基づきタイトルから「留学生」を取り，「日本語学習支援を始めよう !! 日本語パートナー講座」として，開催することとした。

２．講座の概要

講座は11月７日，14日，21日，28日の月曜日に４回実施された。時間などはチラシを参照されたい。以下，概要を紹介する。

第１回「大学と地域の国際化」

１）「留学生30万人計画」「グローバル30」「スーパーグローバル大学創成支援」など，現在推進されている文部科学省が進めている日本の大学の国際化施策について

２）名古屋大学の国際化プラン，留学生数やその割合，出身地域などの現状について

３）留学生に求められる日本語とは
「生活者として求められる日本語」「キャンパス日本語」「学術日本語」の分類と内容

４）愛知県の外国人県民の現状･「あいち多文化共生推進プラン2013 - 2017」･「愛知県 多文化共生社会に向けた地域における日本語教育推進のあり方」について

５）豊田市の外国人市民の現状，多文化共生施策，日本語学習支援について

第２回「日本語学習の支援ってどんなこと？」

１）日本語教育と日本語学習の差について

２）狭義の日本語教育と広義の日本語教育の差について

３）狭義の日本語教育の限界について

４）学習のプロセスについて

第３回「対話と協働を中心とした学習支援の方法」

１）対話と協働とは？

２）新たな能力観，習得観について

第４回「具体的な活動を知ろう」

１）対話型の活動体験

２）活動の原則について

３．受講者の状況とアンケート結果

コミュニティセンターなどにおけるチラシ配布，新聞広告を利用して受講者の募集を行ったところ18名から申し込みがあった。その後１名受講キャンセルが出たため，最終的には17名の受講者で講座を開始した。平成28年度はさくらの会の会員の方も再研修をかねて受け入れたため，何らかの形で外国人に対するボランティア活動をしている方も多かったが，ボランティア自体が初めてという参加者も３人に１人の割合であった。17名中11名が４回全てに出席し，４名が３回出席であった。また，終了時には15名からアンケートを回収することができた。以下，アンケートの結果を検討する。

まずこの講座についてどこで知ったかについては

「新聞広告」が６名で最も多く，次いで「チラシ」が３名,「友人から」が２名であった。新聞広告を利用して広報活動を行っているが，その効果は非常に高いことがわかる。

「受講の目的，期待」については,「外国人・留学生との交流」「ボランティア」に興味があったから，という回答が多かったが，すでにボランティア活動を行っている方からは「スキルアップ」「初心にかえる」など現在の活動を振り返るという目的を持った方も多かった。次に「講座の内容が目的, 期待に合ったものであったか」という質問に対しては，大学で開催する公開講座ということもあり「留学生への学習支援を期待していたが異なっていた」「教え方の具体的な方法などを教えてもらえるかと考えていたが違った」という回答もあった。今年度はタイトルから「留学生」を取り，外国人全般を対象とした日本語学習支援を行う日本語パートナー講座としたが，募集の段階でそれを分かりやすくする必要があることが示された。その一方「生活に密着した自発的な学びのあり方を考えさせられた」「相手の言った以上のことをコメントしない，質問しないなどの聴き手の姿勢に重要性に気がついた」「日常生活を送る中での学習がより重要であることを認識させられた」など，講座で目的としたことが体感できたという声も多く寄せられた。来年度以降も，これらの点にも考慮しながら講座のあり方を検討していきたい。

ー平成２８年度公開講座ー
さくらの会・名古屋大学国際機構国際言語センター共催

日本語学習支援を始めよう!!

日本語パートナー講座

さくらの会は 2004 年より名古屋大学の留学生とその家族の日本語学習を支援しています。
日本語パートナーとして、「教える」という言葉にとらわれず、
テキストは使わないけれど学習者の知っている「ことば」から「対話」へと広げていく、
『日本語で話そう』を合言葉にボランティア活動をしています。

ボランティアとして何かをしたいと思っている方、
日本語パートナーについて学んでみませんか。

＊講座内容と日程

	日　程	内　　容
第1回	11月　7日（月）	大学と地域の国際化
第2回	11月14日（月）	日本語学習の支援ってどんなこと？
第3回	11月21日（月）	対話と協働を中心とした学習支援の方法
第4回	11月28日（月）	具体的な活動を知ろう

時間　１４時４５分　～　１６時１５分

場所　名古屋大学アジア法交流館３階の研修室８(ALEP 8)

講師　名古屋大学国際機構国際言語センター
教授　衣川　隆生

＊昨年と同じ内容ですので、継続の方はご遠慮下さい。

＊会員募集を前提としたものではありません。公開講座です。

活動報告

FD 活動の報告

第74期・第75期（2016年度）日本語研修コース

第35期　上級日本語特別コース（2015年10月～2016年9月）

全学向日本語プログラム　2016年度

学部留学生を対象とする言語文化科目「日本語」

短期留学生日本語プログラム　2016年度

第17期　日韓共同理工系学部留学生予備教育コース

日本語教育メディア・システムの開発

FD 活動の報告

俵　山　雄　司

日本語･日本文化教育部門では，平成14年に FD 班を設け，以後，現在に至るまで，日本語・入門講義の授業を担当する教員全員で FD 活動に取り組んできた。さらに平成16年には，留学生センターの委員会として FD 委員会を設置し，教員個々の教授能力の向上，授業の改善を目指している。

今年度は，平成27年度に新たに策定した「平成28年度から32年度までの FD 活動計画」の最初の年度にあたる。以下にその概要を示す。

平成28年度から32年度までの FD 活動計画

「成功例・要改善例の共有による教育改善」

①報告の執筆と共有

・年度ごとに，教員個人が１つの授業を取り上げ，そこで行った試みの成功事例（あるいは要改善となった事例）の報告を執筆する。報告は FD 担当者がとりまとめ冊子にして全員に配布。

②口頭による報告とディスカッション

・年度ごとに担当者が報告を２つ選び，それについて，授業者に発表してもらいディスカッションの機会を設ける。

上記のサイクルは，平成29（2017）年度末に①の報告を執筆するところから開始となり，平成28（2016）年度は，周知・準備期間としての位置付けであった。しかし，名古屋大学教育奨励費プロジェクトの枠で開催された下記のシンポジウムの内容が，本 FD 活動の趣旨と密接に関連するため，本 FD 活動の研修会も兼ねて実施することにした。

国際シンポジウム「日本語教育実践の過程と成果の可視化に向けた記述枠組み―単位の互換性，比較可能性を目指して―」

日時：2017年３月７日（火）13:30～17:00

場所：名古屋大学CALE フォーラム／名古屋大学国際棟ロビー

内容：

まず，本学の協定校である香港大学の萬美保氏が「日本語カリキュラム改訂の背景と手順 Can-do リストの役割について―「香港大学日本語スタンダーズ」の例―」という題目で基調講演を行った。

その後，教育実践事例の共有を目的としたブースセッションを実施した。ブースは国内先進事例２件（北海道大学の小河原義朗氏と鄭惠先氏，東京外国語大学の工藤嘉名子氏），学内６事例（全学向け日本語，G30国際プログラム，日本法教育研究センター，短期日本語プログラム NUSTEP，日韓共同理工系留学生予備教育，教養教育基礎科目の日本語）の計８事例であり，来場者と活発な意見交換が行われていた。

最後に，香港大学の萬美保氏，北海道大学の小河原義朗氏，東京外国語大学の工藤嘉名子氏，名古屋大学衣川隆生氏によるパネル・ディスカッションを行い，日本語学習の学習履歴，帰国後の単位認定の際に枠組みを利用する際の課題，可能性を検討した。

シンポジウム当日は，国際言語センターの専任教員および非常勤講師の大半が出席した。また，学外からの参加者も多数来場し，参加者の合計は約70名であった。

第74期・第75期（2016年度）日本語研修コース

衣　川　隆　生

１．研修生

第74期日本語研修コースの受講生はすべて文部科学省より配置された大使館推薦の国費留学生であり，合計22名であった。その内訳は人文社会学系を専攻する学生が12名，理工系を専攻する学生が10名で，その全てが名古屋大学に進学予定であった。部局別では，国際開発研究科が７名，情報科学研究科６名，工学研究科３名，法学研究科が２名，文学研究科，医学系研究科，生命農学研究科，理学研究科が各１名であった。出身国籍別では，19ヶ国（ブータン，カンボジア，大韓民国，フィリピン，ラオス，ソロモン，ベネズエラ，ペルー，メキシコ，ウクライナ，モンテネグロ，ドイツ，ロシア，イラン，レバノン，ナイジェリア，モロッコ各１名）であった。第74期は22名のうち，15名が日本語研修コースを受講したが，このうち，１名は研究の都合上，コース途中で全学向日本語コースに移動した。この移動した学生を合わせて８名が全学向けの日本語講座を受講した。

第75期日本語研修コースの受講生もすべて文部科学省より配置された大使館推薦の国費留学生であり，合計５名であった。このうち２名が６ヶ月の研修終了後愛知教育大学で研修を続ける教員研修生であり，３名が名古屋大学に進学予定の研究留学生であった。その出身国は４ヶ国（フィリピン２名，米国，キプロス，キルギス各１名）であった。５名中２名は中上級レベルの既習者で全学向け日本語コースのSJ300（中上級標準日本語コース）を，３名は未習者であったが，特別日本語研修コースは設けず，全学向け日本語コースのIJ111（初級集中日本語コース）を受講させることとした。そのため，以下では第74期日本語研修コースの内容のみを報告する。

２．クラス編成

授業は，２クラス編成とし，専任教員２名，非常勤講師７名の計９名が担当した。

３．時間割と日程

2016年度においても，第72期以降と同様，８月第一週まで15週間の授業を行い，夏休みを挟んで９月に修了式を実施するという日程にした。

授業は月曜日から金曜日まで，午前８時45分から午後２時30分まで90分授業を３コマ行った。開講式の前に行う到着時のオリエンテーションは４月５日（火）に行った。オリエンテーションでは，名古屋大学での日本語教育の全体像及び日本語研修コースの概要を説明し，その後，未習者には学習背景アンケート，既習者にはプレースメントテストおよびインタビュー，さらに学習背景アンケートも行った。

４．カリキュラム

カリキュラムは，これまでのように (1) 主教材 A Course in Modern Japanese {Revised Edition}, Vol.1 & ２（名古屋大学日本語教育研究グループ編）を中心とする授業，(2) その他の活動（テーマに沿って書いて話す：楽しかったこと，趣味，国の観光地，国との習慣の違い）を行った。第71期より最終週に行ってきたビデオ作成プロジェクトを第74期も実施し「第74期日本語研修コース紹介」を実施した。このプロジェクトは，留学生が主体となりクラスメート，教室，日本語プログラム，国際言語センター，名古屋大学など紹介したい人や場所を決定し，台本作成，練習，撮影を行うというものである。第74期においては，ドラマ仕立てで日本語プログラムの内容を紹介したり，研究室の友人や寮でお世話になっている方を招待してインタビューを行ったりとこれまでとはひと味違った内容となった。作成したビデオは修了式当日に上映された。

以下，修了アンケートの結果とともに授業内容を報

告する。第74期は14名の学生から回答が得られた。

まず，専門と日本語学習の両立についての質問に対しては，「入試」「発表」「プロポーザルの作成」が特に後半大変で日本語学習に集中できなかったという回答が半数以上から寄せられた。ここ数年の傾向であるが，コース途中の６，７月に入試が実施される研究科も増えている。また，８，９月の入試であっても，事前に研究計画書等を準備しなければならないため，それに時間を取られる学生が多いことがこの結果からもわかる。

また，クラス分けについては，４回のテストごとに到達度に合わせてクラスを分けるべきだという意見と，適切であったという両方の意見が寄せられた。

以下，内容別に振り返る・

(1) 教科書を中心とする授業（１～14週）

教科書については有用な教材であるという評価が多かったものの，「英語の説明がもっとあると理解しやすい」「初級に対しては英語の説明は不十分である」など，解説が不十分であるという声も出されている。

・Drill/Dialogue

ほぼ全員がよかった，と答えているものの，「意味が理解できていない状態でのドリルは有用ではない」など，納得した上での練習を求める声もある。また，日常会話を中心とした Dialogue については，「暗記はリアルライフでは役立たない」「もっと自由に」「使うべき表現が決まっているので時に Drill のようだ」という指摘もあった。これらは，授業の運営方針についての有益なコメントであり，担当教員で共有した上で，改善の方針を立てる必要がある。

・Aural Comprehension

各課の Aural Comprehension は，宿題として事前に回答してくることになっている。「未習語も多く，時間がかかる」，「早すぎる」というコメントを書く学生も少なからずいた。

・Reading

Reading に関しては第72期より教科書の読解と合わせて，多読の授業を前半に導入した。これについては「有用であった」というコメントが多かったが，「教室活動として読む時間をとってほしい」という声もあった。これは，読み切れなかった部分を自宅学習として勧めたことに対する回答であると考えられる。自宅学習，課外学習の有用性を明示し，説明の機会を持つことも重要であることがわかる。

・漢字

漢字に関しては，「語彙知識不足のため，漢字と語彙を結びつけることができず難しかった」という意見も出された。毎年示される課題ではあるが，初級コースにおける漢字学習の目標と内容の再検討が必要である。

５．まとめと問題点

修了アンケートの結果の最初でも指摘したが，近年，大学院入試の日程を早め，10月入学を推奨する傾向にあるため，書類の準備，入試対策で日本語学習に時間を割けない状況が入試を控えている学生にとってはコースの半ばで生じる。一方，翌年２月入試，４月入試の学生の場合は，比較的コース終了時まで日本語学習に集中できる。このような学生が一つのクラスに混在していることが運営上大きな課題として顕在化している。この課題の解決を図るため，受け入れ時でのオリエンテーションと受講コースの選択相談に時間を割くとともに，研究科での受け入れ教員との連絡も密に取り，彼らが日本語研修生からスムーズに研究科学生へと移行できる体制を構築していく必要がある。また，「決められた内容ではなく，もっと自由に話す時間を」「自由な内容を」という声も多い。これらの声を今後のカリキュラム改革にも役立てていきたい。

第35期　上級日本語特別コース（2015年10月～2016年９月）

籾　山　洋　介

第35期上級日本語特別コースは，「上級レベルの日本語能力の習得（話す・聞く・読む・書くのすべてにわたって）」「日本に関する基礎的理解」「各自の専門分野の基礎的な研究方法の習得と実践」の３つを目標として行われた。

学習者は，12カ国，19名（インドネシア：５名，韓国：３名，インド：２名，カナダ：１名，カンボジア：１名，コロンビア：１名，タイ：１ 名，チェコ：１名，トルコ：１名，ベトナム：１名，ポーランド：１名，モンゴル：１名であった。また，10名の教員が指導に当たった。

以下，主要なプログラムおよびアンケートの結果などについて概説する。

(1) 教科書による日本語学習（10月～４月）

『名古屋大学　日本語コース中級Ⅰ』『名古屋大学　日本語コース中級Ⅱ』『名古屋大学　日本語コース中級Ⅰ　聴解ワークシート』『名古屋大学　日本語コース中級Ⅱ　聴解ワークシート』（以上，名古屋大学日本語教育研究グループ編）を教科書として日本語学習を行った。補助教材として，「プリテスト（予習のチェック）」「復習クイズ」「文法補足説明」を使用した。また，３課ごとにテスト（筆記テストおよび話すテスト）を実施した。話すテストについては，録音に基づき個別指導も行った。

(2) 応用会話（10月～４月）

教科書の会話が大学などの限られた場におけるものであることから，社会における様々な場における会話力（表現力，運用能力）を高めることを狙いとして，「応用会話」を行った。教材として，各種のモデル会話などを作成し，使用した。

(3) 入門講義・特殊講義（10月～７月）

日本に関する基礎知識を身に付けること，レポートのための基礎知識および基本的な研究方法を習得することを狙いとして，10月～２月（前期）および４月～７月（後期）の期間，それぞれ５つの分野の入門講義を14回（各90分）行った。前期は，「日本文化論Ⅰ」「国際関係論Ⅰ」「日本語学Ⅰ」「言語学Ⅰ」「日本文学Ⅰ」であり，後期は，「日本文化論Ⅱ」「国際関係論Ⅱ」「日本語学Ⅱ」「言語学Ⅱ」「日本文学Ⅱ」であった。学生は，前期は５科目のうち３科目以上を選択，後期は５科目のうち２科目以上を選択することとした。なお，入門講義は全学留学生が受講できるものであり，大学院研究生，短期交換留学生などとともに受講した。

また，特殊講義（必修）として「音声学」（90分 × ７回）を行った。

(4) 作文（レポートのための基礎訓練）（１月～５月）

レポート作成に必須の基礎知識を体系的に身に付けることを狙いとして，「書き言葉と話し言葉の基本的な違い」「論文･レポートに役立ついろいろな表現」「文末表現の諸相」「図やグラフの説明の仕方」「引用の仕方」「要約の仕方」「論文で使われる言葉」などについて学習した。

(5) 発展読解（10月～４月）

発展読解として，「精読」（教科書の読解教材に代わるもの），「新聞読解」，「問題付き読解」（生教材に読解の手助けとなる問題を付したもの），「本の読解」（エッセイ・小説など，教員が用意したものの中から，学習者が興味のあるものを選択），「特別読解」（学習者が，新聞などから自分で記事を見つけ，授業でも教師役をする）などを行った。

(6) 上級文法・語彙（兼Ｎ１対策）（10月～４月）

上級レベルの文法・語彙の練習問題（18回分）を作成し，使用した。これは，日本語能力試験（Ｎ１）の準備を兼ねるものである。

(7) スピーチ（10月～７月）

自国の紹介，自分がふだん考えていることをはじめとする様々なトピックについて，学生がスピーチを行った（１人，１回，10分程度，スピーチ後に質疑応答／各学生，年２回実施）。

(8) レポート（１月～７月）

学生各自がテーマを決め，教員の個別指導のもとでレポートを作成した。分量はＡ４，15～30枚程度である。なお，今期も，「論文」「随筆」「創作」「報告」「作文」という５つのカテゴリーの中から，学生が１つを選んで取り組むこととした。その内訳は，論文:15名，随筆：２名，創作（小説）：２名であった。研究成果は『2015～2016年度日本語・日本文化研修生　レポート集』（433ページ）として発行した。また，中間発表会（５月，発表：20分／質疑応答：10分），最終発表会（７月，発表：20分／質疑応答：５分）を実施した。レポートの題目は以下の通りである。

(1) 創作（小説）

1．シミトコフスカ･ヨアンナ（ポーランド）「ツバキのない冬」
2．マリア［Orjuela Castillo Maria Carolina］（コロンビア）「すれ違った愛」

(2) 随筆

1．フロレンティナ・アドリエンネ・オベルタ（インドネシア）「神社を巡る旅」
2．ニャムトムル・ダワースレン［ママガ］（モンゴル）「『花は咲く』への旅」

(3) 論文

1．エマ･ウール（カナダ）「日本は女装者のパラダイスか―女装を通して見た北米と日本の異文化間比較―」
2．エミ・スティヨリニ（インドネシア）「「腐女子」はどんな女性？」
3．キム･ミンジ（韓国）「日本における地獄絵と死後の世界―地獄絵の影響について―」
4．ギュンジュム･ヤークップ（トルコ）「昭和のなつかしさ」
5．グエン・テイ・スォン（ベトナム）「枯山水庭園の美」
6．コリク･ヌルヴィタサリ（インドネシア）「神道とイスラム教の動物観―神社にある動物の石像を通して―」
7．チェ･ジョンウォン（韓国）「名古屋めしの地理的考察」
8．トォン･プッティアロン（カンボジア）「日本における報道の自由―特定秘密保護法を中心に―」
9．ノヘイル･アダム（チェコ）「現代日本語のコーパス―複合動詞の研究に向けて―」
10．パッタマウォラクン　ワサリン［ニット］（タイ）「日本の飲み会の社会的な機能と実態―大学生を中心に―」
11．パワル･ガウリ（インド）「日本のシングルマザー問題」
12．ファドルラマン・リフキ・アフマド（インドネシア）「日本におけるトレーディングカードゲーム」
13．リズカ・ハニファー（インドネシア）「「うちに，間に，間」の意味分析―インドネシア語との対応関係を中心に―」
14．リュー･ギュンボン（韓国）「韓日「子どもの時代に行われる儀礼」比較」
15．ルトゥジャ･トゥンガトカー（インド）「日本語における動物を表すオノマトペ―他言語と比較して―」

(9) 総合演習（12月／５月～７月）

日本事情・日本文化に対する理解を深めることと上級レベルの総合的な日本語力を養成することを狙いとして，前期と後期の両学期に総合演習を行った。教材は新聞・雑誌の記事やテレビ番組などを使用し，学生は多様な言語活動を行った。テーマは以下の通りである。

前期：「名古屋の食べ物について調べる」（１週間）
後期：「ことばと遊び」（１週間），「お茶とやきもの」（３週間），「日本人とスポーツ：心技体の世界」（１週間）

なお，「お茶とやきもの」についての総合演習では，グループに分かれて，調査・インタビュー等を行い，ジンを作成した。調査担当者，ジンのタイトルは以下の通りである。

１．エマ，ニット，スオン，ガウリ，ミンジ，ルトゥジャ，マリア，ヨアンナ，ママガ，ティアロン「お茶飲んでみゃあ？」
２．リュー，ジョン，リズカ，エミ，フロレンティナ，コリク，アダム，ヤークップ，リフキ「茶の友」

(10) 漢字テスト・漢字コンクール（10月～７月）

漢字学習を計画的に進めることを狙いとして，「漢字テスト」(20回)を行った。また，漢字学習をさらに活性化することを狙いとして「漢字コンクール」（４回）を実施した。

(11) その他

以上に加えて，独話練習，ことばのクラス(ゲームなどを通して日本語力を高めるプログラム）なども行った。さらに，本学の学部生向けに開講されている教養科目の１つである「留学生と日本：異文化を通した日本理解」にも参加した。

(12) アンケート

2016年７月に，学習者に対して，コースの内容などに関するかなり詳細なアンケートを行った。以下,「全体としてコースの内容に満足していますか」という質問のみについて，アンケート結果を紹介する。

満足度	満足していない		満足している	
評価	0	1	2	3
回答者数	０人	０人	10人	９人

(13) 今後の課題など

まず，これまで総合演習で何度か「やきもの」をテーマとしたが，今期初めて「お茶」も取り上げ，学生は様々な課題・活動に熱心に取り組み，成果を挙げた。近年，日本の多様なサブカルチャーに興味を持っている学生が少なくないが，伝統文化についても学ぶ場を設けることが重要であると考え，やきものに加えお茶を取り上げたわけである。今後も，学生が日本にいながら自主的に学ぼうとしない可能性がある伝統文化の重要なテーマを学ぶ機会を作っていきたい。

また，今期も，これまで希望する者が多かった「上級レベルの文法・語彙」の学習を実施した。これは，日本語能力試験（Ｎ１）の準備を兼ねるものである。なお，今期は練習問題を拡充し，18回分の問題を作成し，授業を行った。「「上級文法・語彙（兼Ｎ１対策)」は役に立ちましたか」という質問についてのアンケート結果は以下の通りである。

	役に立たなかった		役に立った	
評価	0	1	2	3
回答者数	０人	２人	６人	11人

さらに，上記の通り，「漢字テスト」(20回）および「漢字コンクール」（４回）を定期的に行い，漢字学習を促してきたが，近年，漢字に対する取り組みの個人差がますます大きくなっている。このことを踏まえ，これまで，各回の漢字テストで90パーセントに満たなかった学生に「再テスト」を行ってきたことに加え，再テストでも90パーセントに満たなかった者に対しては「再々テスト」を実施し，学習の徹底をはかった。

全学向日本語プログラム　2016年度

李　　澤　熊

全学向日本語プログラムは、名古屋大学に在籍する留学生(大学院生、研究生など)、客員研究員、外国人教師などを対象に、日常生活や大学での研究生活に必要とされる日本語運用能力の養成を目指して開講されている。

2016年度は昨年度に引き続き、日本語プログラムを見直し、効率を図るとともに、全学の留学生を対象とする全学向け日本語講座の拡充計画を立案し、実施した。

１．2016年度の概要

１）2016年度は、前期・後期に「集中コース（IJ コース)」と「標準コース（SJ コース)」を開講し、アラカルト授業として「オンライン日本語コース」「漢字コース」「入門講義」「ビジネス日本語コース」を開講した。集中コースは、前期については、週20時間４レベル６クラス、後期については、４レベル８クラスを設けた。後期にクラス数が増えたのは、短期交換留学生の増加によるものである。なお、集中コースはすべて午前の開講となった。

　標準コースは、前期については７レベル９クラスを設けた。また、後期については、７レベル13クラスを設けた。後期にクラス数が増えたのは、短期交換留学生の増加と国費の日本語研修生の受け入れがあったためである。なお、「グローバル30コース」に対応するために、標準コースの一部(SJ101～ SJ202)の開講時間帯を午前に変更した。

２)昨年と同様、受講登録をより円滑に行えるように、ホームページを刷新した。また、後期の開講時期を名古屋大学全体の授業日程とあわせることにより、スムーズなコース運営を図った。

３）例年と同様、初級Ⅱ以上を希望する受講者を対象にクラス分けテストを実施し、日本語能力レベルに応じたクラス編成をした。

４）各クラスにおいて、出席および成績の管理を行い、授業終了時に出席率および成績から合格者を発表し、合格者は次期進級する際クラス分けテストを免除している。再履修者についても同様である。

５）全学向日本語プログラムは、基本的には単位取得をする授業ではないが、短期交換留学生に関しては、別途に単位認定基準を設け、単位認定を行った。全学向日本語プログラムと NUPACE 日本語の成績処理方法を統一し、コース運営の効率化を図った。

６)「学生の出入りが激しい」という問題点を解消するために、登録の時に指導教員による「受講承諾書」の提出を義務化した。

７）FD 活動の一環として学生によるコース評価をレベル・科目別に行った。

２．期間と内容

１）前期開講期間：2016年４月11日（月）～７月25日（月）14週間

２）後期開講期間：2016年10月３日（月）～2017年１月30日（月）14週間

３）開講クラスと内容：

コース 科目	レベル クラス数	目　標	教　材
標準 コース (standard)	初級Ⅰ SJ101	日本語がほとんどわからない学生を対象に、日本語文法の初歩的な知識を与えるとともに日常生活に必要な話しことばの運用能力を育てる。(漢字100字、単語数800語)	*A Course in Modern Japanese,* [*Revised edition*] *Vol.**1** & **CD***
	初級Ⅱ SJ102	初級Ⅰ修了程度のレベルの学生を対象に、さらに基礎日本語の知識を与えるとともに日常生活に必要な話しことばの運用能力を育てる。(漢字150字、単語数900語)	*A Course in Modern Japanese,* [*Revised edition*] *Vol.**2** & **CD***
	初中級 SJ200	初級Ⅰ、Ⅱで学んだ文法事項の運用練習を行うとともに、中級レベルで必要となる漢字力、読解力を含め、日本語運用能力の基礎を固める。(漢字200字、単語数1000語)	国際言語センター開発教材
	中級Ⅰ SJ201	初中級修了程度のレベルの学生を対象に、日本語の文法を復習しつつ、４技能全般の運用能力を高める。 (漢字300字、単語数1200語)	『現代日本語コース中級Ⅰ』
	中級Ⅱ SJ202	中級Ⅰ修了程度のレベルの学生を対象に、日本語の文法を復習しつつ、大学での勉学に必要な日本語能力の基礎を固める。 (漢字400字、単語数2000語)	『現代日本語コース中級Ⅱ』
	中上級 SJ300	中級Ⅰ、Ⅱで学んだ学習項目を実際の場面で使えるよう運用練習を行い、上級レベルの日本語学習の基礎を固める。 (漢字500字、単語数3000語)	国際言語センター開発教材
	上級 SJ301	中上級修了程度の学生を対象に、大学での研究や勉学に必要な口頭表現、文章表現の能力を養う。 (漢字800字、単語数4000語)	国際言語センター開発教材
集中 コース (intensive)	初級Ⅰ IJ111	日本語がほとんどわからない学生を対象に、日本語文法の初歩的な知識を与えるとともに日常生活に必要な話しことばの運用能力を育てる。(漢字150字、単語数800語)	*A Course in Modern Japanese,* [*Revised edition*] *Vols.**1,2** & **CD***
	初級Ⅱ IJ112	標準コース初級Ⅰ修了程度の学生を対象に、日本語文法の基礎を固め、日常生活だけでなく勉学に必要な基礎的日本語運用能力を養う。(漢字250字、単語数1000語)	*A Course in Modern Japanese, Vos.**2** & **CD***, 作成教材
	中級Ⅰ IJ211	集中コース初級Ⅰまたは標準コース初級Ⅱ修了程度の学生を対象に、日本語の文法を復習しつつ、４技能全般の運用能力を高める。 (漢字300字、単語数1200語)	『現代日本語コース中級Ⅰ』および国際言語センター作成教材
	中級Ⅱ IJ212	集中コース初級Ⅱまたは標準コース初中級修了程度の学生を対象に、４技能全般の運用能力を高め、研究に必要な日本語能力の基礎を固める。(漢字400字、単語数2000語)	『現代日本語コース中級Ⅰ・Ⅱ』
漢字 コース (kanji)	漢字1000 KJ1000	漢字300字程度を学習した学生を対象に、日本語能力試験N3-N２程度の漢字1000字を目標に学習する。	『漢字マスター　Vol.3　２級漢字1000』
	漢字2000 KJ2000	漢字1000字程度を学習した学生を対象に、日本語能力試験Ｎ２の上からＮ１程度の漢字約2000字およびその語彙を学習する。	『日本語学習のためのよく使う順 漢字2100』
入門 講義 (introductory)	次の専門分野を日本語でやさしく解説する講義形式の授業である。日本語運用能力を高めるとともに、日本理解を助ける科目である。標準コース中上級レベル以上の日本語能力が受講資格である。		
	国際関係論Ⅰ・Ⅱ IR200	Ⅰ：開講せず Ⅱ：グローバリゼーションをキーワードとして、いくつかの認識方法を手がかりに、現代国際環境の変容を見る。	講読文献などは授業中に適宜指示する。
	日本文化論Ⅰ・Ⅱ JC200	Ⅰ：この講義では、日本の家族や学校をめぐる最近の問題を取りあげ、受講者の出身国の事例と比較しながら、日本の社会や文化の特徴を議論していく。取りあげるテーマは、夫婦別姓、国際結婚、いじめ、不登校、フリーターなど。 Ⅱ：日本の社会や文化の特徴をより深く理解するために、韓国を比較の対象として取りあげ、東アジアにおける「近代」(西洋文明との出会い) の意味を考える。	講読文献などは授業中に適宜指示する。

コース 科目	レベル クラス数	目　標	教　材
入門 講義 (introductory)	言語学Ⅰ・Ⅱ GL200	Ⅰ：主に現代日本語を素材として、言語学の基礎を学ぶ。取り上げるテーマは、言語学の基本的な考え方、人間の言葉の一般的特徴、言葉の意味（意味論）、言葉と社会（社会言語学）、世界の言語と日本語（言語類型論）である。 Ⅱ：言語学の一分野である意味論（認知意味論を含む）について学ぶ。特に、現代日本語を素材として、類義表現・多義表現などの分析方法を身につけることを目指す。	講読文献などは授業中に適宜指示する。
	日本語学Ⅰ・Ⅱ JL200	Ⅰ：主に日本語教育で問題となる文法項目を取りあげ、整理・検討することによって、文法の基本的知識を身に付けることを目標とする。取りあげるテーマは品詞、ボイス、テンス、人称、活用等 Ⅱ：主に日本語教育で問題となる文法項目を取りあげ、整理・検討することによって、文法の基本的知識を身に付けることを目標とする。	講読文献などは授業中に適宜指示する。
	日本文学Ⅰ・Ⅱ NL200	Ⅰ：日本の詩歌について、万葉集（日本最古の和歌集）から J-POP の歌詞まで、時代を追って鑑賞する。奈良時代から江戸時代までを概観する。 Ⅱ：日本の詩歌について、万葉集（日本最古の和歌集）から J-POP の歌詞まで、時代を追って鑑賞する。明治時代から現代までを概観する。	講読文献などは授業中に適宜指示する。
オンライン・ 日本語コース	・中上級読解作文 OL300 ・オンライン漢字 OLkj	中級レベルを修了した学習者を対象に、400字～600字程度の文章の理解とその文章の要約や関連作文を課し、文章表現能力を養う。初中上級レベルの学習を修了した学習者を対象とした漢字のクラスを開講している。毎週１回オフィースアワーを開設する。	Moodle 版日本語教材
ビジネス日本語 Business	ビジネス日本語 Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ BJ400	将来、日本の企業に就職を希望する人はもちろん、日本人のビジネスコミュニケーションに対する理解を深めたい留学生を対象とし、日本のビジネス・マナー及びビジネスで用いられる日本語表現を身につける。	Ⅰ：『ビジネスのための日本語・初中級』 Ⅱ,Ⅲ, Ⅳ:『新装版 商談のための日本語・中級』

（入門講義科目の「Ⅰ」は秋学期に、「Ⅱ」は春学期に開講する。）

３．受講生数

１）標準コース

	前期			後期	
	登録者数	修了者数		登録者数	修了者数
初級Ⅰ（２クラス）	45	33	初級Ⅰ（５クラス）	103	82
初級Ⅱ	21	15	初級Ⅱ	35	24
初中級	18	12	初中級	31	21
中級Ⅰ	24	17	中級Ⅰ	34	27
中級Ⅱ	38	27	中級Ⅱ	33	25
中上級	36	18	中上級（２クラス）	58	35
上級（２クラス）	50	25	上級（２クラス）	53	32
漢字1000	45	27	漢字1000	33	25
漢字2000	30	24	漢字2000	31	25
国際関係論	35	12	国際関係論	開講せず	開講せず
日本文化論	46	30	日本文化論	50	36
言語学	43	19	言語学	29	18
日本語学	43	21	日本語学	31	18
日本文学	50	26	日本文学	40	28
ビジネス日本語Ⅱ	45	23	ビジネス日本語Ⅰ	63	35
ビジネス日本語Ⅳ	35	24	ビジネス日本語Ⅲ	39	27
Online 日本語	34	17	Online 日本語	49	23
計	638	370	計	712	481

２）集中コース

	前期			後期	
	登録者数	修了者数		登録者数	修了者数
初級Ⅰ･Ⅱ（２クラス）	26	20	初級Ⅰ･Ⅱ（３クラス）	39	35
初級Ⅱ・初中級	9	9	初級Ⅱ・初中級	15	13
初中級・中級Ⅰ（２クラス）	20	15	初中級・中級Ⅰ（２クラス）	27	20
中級Ⅰ・Ⅱ	13	11	中級Ⅰ・Ⅱ（２クラス）	27	20
計	68	55	計	108	88

４．学生によるコース評価

昨年度と同様に授業改善と教授能力の向上を図るために、前期と後期に受講者を対象に、コース内容に関するアンケートを実施した。回答者数（短期交換留学生を含む）は前期と後期、それぞれ119名と163名である。

アンケートの内容はレベルによって異なるが、各レベルに共通して尋ねた質問のうち３つの項目について報告する。

質問１:勉強したことがよく理解できたと思いますか。
質問２：授業内容は自分にとって役に立ったと思いますか。

前期

	Ｑ１	Ｑ２	合計
そう思う	55	73	54%
どちらかといえば「はい」	48	36	36%
どちらとも言えない	13	7	8%
どちらかといえば「いいえ」	1	2	1%
そう思わない	2	1	1%
回答者合計	119	119	100%

後期

	Ｑ１	Ｑ２	合計
そう思う	66	105	53%
どちらかといえば「はい」	59	38	30%
どちらとも言えない	26	10	10%
どちらかといえば「いいえ」	10	9	6%
そう思わない	2	1	1%
回答者合計	163	163	100%

以上の結果から分かるように、全般的に良好な評価結果が得られた。ただ、受講者によっては「漢字をもっと教えてほしい」「日常生活に関する話題（教材）を取り上げてほしい」「自分と関係のない専門分野（トピック）は難しい」「学生同士の会話練習がもっとあればいいと思う」「話す練習の機会を増やしてほしい」というような指摘もあった。今後、このようなニーズに対応していくために、さらに工夫が必要であろう。

質問３：日本語の授業について意見やアドバイスがあったら書いてください。

この質問には様々な回答があったが、全般的に寛大な評価が多かった。しかし、中には以下のような要望も出ており、今後さらなるプログラムの改善に努める必要があると感じた。

・「少人数のクラスがいいと思う」
・「敬語についてもっと勉強したかった」
・「上級向けの文法クラスを設けてほしい」
・「上級の教材は生教材を使ったほうがいいと思う」

５．今後の課題

以上のように、2016年度は昨年度の実施結果を踏まえ、留学生の多様なニーズに対応するために、さらにコースの改善を図った。例えば、昨年に引き続き、特に後期の開講時期を名古屋大学全体の授業日程とあわせることにより、スムーズなコース運営を図った。

しかし、ここ数年、本学では国際化戦略に伴い、留学生を対象とした様々なプロジェクト型の教育が積極的に行われており、日本語教育を担っている本センターの役割はさらに重要になることが予想される。

そこで来年度は、平成30年度に向け、既存の日本語プログラムを見直し、さらに効率を図るための準備に取りかかる予定である。概要は次の通りである。

全学向日本語プログラムは、現在、NUPACE 生、研究生、正規生を主な対象としたプログラムであるが、研究生、正規生は専門の勉強が優先になっているということもあり、受講者の半数以上が途中でドロップア

ウトしているのが現状である。そこで、研究生、正規生を主な対象とした週３コマのコースを開講し、大きな負担にならない程度に、できるだけコース終了時まで続けられるようなコース設計を考えている。また、日本語で研究を進めなければならない名古屋大学人文学研究科の研究生受け入れ基準が「日本語能力試験Ｎ２以上」ということを考慮し、NI、Ｎ２レベルの上級コースは設けない。但し、「総合日本語」という形で、５限、６限に上級者向けの授業は開講する予定である。なお、現在、週10コマの集中コースと週５コマの標準コースを開設しているが、NUPACE 専用のコースとして週５コマのコースのみを新設し、週10コマの集中コースは廃止する。

学部留学生を対象とする言語文化科目「日本語」

浮　葉　正　親

学部に在籍する留学生が大学で所定の単位を取得していくためには，講義を聴く，ノートをとる，ゼミで発表する，レポート・答案を書く，ディスカッションをするなど，高度な日本語運用能力が要求される。授業ではそのための訓練を行うとともに，日本人学生や教員とのコミュニケーション能力の育成や日本社会・文化に対する理解を深めることを目的としている。

2016年言語文化科目「日本語」の科目および受講者数は以下の通りであった。

期	対象	内容	時間	担当者	受講者数
１期（１年前期）	文系	文章表現	月３限	國澤里美	9
		口頭表現	木３限	西田瑞生	9
	理系	文章表現	火２限	俵山雄司	1
		口頭表現	木２限	西田瑞生	1
	工学（国）	口頭表現	月２限	國澤里美	3
		文章表現	水２限	魚住友子	3
	工学（私）	文章表現	月２限	浮葉正親	3
		口頭表現	水２限	鷲見幸美	3
２期（１年後期）	文系	文章表現	金２限	國澤里美	9
		口頭表現	木３限	俵山雄司	9
	理系	文章表現	火２限	浮葉正親	2
		口頭表現	木２限	西田瑞生	1
	工学（国）	口頭表現	月２限	西田瑞生	6
		文章表現	水１限	魚住友子	3
	工学（私）	文章表現	月２限	國澤里美	3
		口頭表現	水１限	鷲見幸美	3
３期（２年前期）	文系	文章表現	火１限	浮葉正親	9
４期（２年後期）	文系	文章表現	木１限	浮葉正親	12

クラス

文系：文学部・教育学部・法学部・経済学部・情報文化学部社会システム情報科

理系：医学部・理学部・農学部・情報文化学部自然情報学科

工学（国）：工学部（国費留学生・政府派遣留学生）

工学（私）：工学部（私費留学生・日韓理工系留学生）

授業内容

１年前期

文系・文章表現

レポートを作成するために，文体・アカデミックワードなどの文章表現，引用･要約の仕方を学習した。実際に学習者がアウトラインを立て，それをグループで検討した上で，レジュメ・レポートを作成した。また，大学生活で必要な文章表現技術の向上を目指して，データ・資料の読解，説明文・意見文の作成を行なった。さらに，依頼・提案・謝罪のメールの練習も取り入れた。

レポートを作成するために，文体・アカデミックワードなどの文章表現，引用･要約の仕方を学習した。実際に学習者がアウトラインを立て，それをグループで検討した上で，レジュメ・レポートを作成した。また，大学生活で必要な文章表現技術の向上を目指し

て，データ・資料の読解，説明文・意見文の作成を行なった。さらに，依頼・提案・謝罪のメールの練習も取り入れた。

文系・口頭表現

大学生活，とくに，学会やクラスでのプレゼンテーションにおいてスムーズで魅力的な口頭表現ができるようになるための練習をした。構造的なわかりやすさということに注目し，いくつかのトピックを話す場合に，同じトピックのものをまとめて話すグルーピング，トピックをまとめたものを最初に話すラベリング，どの順序で話すかというオーダリングを考えて話す練習をした。比較，対照によってわかりやすくする方法なども学んだ。

理系・文章表現

短い文章からはじめて徐々に長い文章を書く練習を行った後で，各自がテーマを設定し，いくつかの文章を読んでまとめる最終レポートを執筆した。最終レポートについては，テーマ設定，材料集めやアウトラインの作成などを授業中の作業や宿題によって少しずつ進めていった。また，その過程で，「協働学習」の方法を取り入れ，受講者同士でお互いが書いたものについて検討したり，コメントしたりする活動を行った。

理系・口頭表現

大学生活，とくに，学会やクラスでのプレゼンテーションにおいてスムーズな口頭表現ができるようになるための練習をした。構造的なわかりやすさということに注目し，いくつかのトピックを話す場合に，同じトピックのものをまとめて話すグルーピング，トピックをまとめたものを最初に話すラベリング，どの順序で話すかというオーダリングを考えて話す練習をした。比較，対照によってわかりやすくする方法なども学んだ。

工学系（国費）・文章表現

読解能力と論理的文章作成の基礎力養成を目的に，日本の大学生・文化・社会や科学技術を扱った新聞等（放射能，非正規雇用，環境問題等々）の読解と討論，要約・意見・ポイントを整理して書く練習を行った。その他，板書文字，文体，句読点，原稿用紙やメール・レジュメの書き方の学習，期末発表を行った。学習態度には個人差が大きかった。

工学系（国費）・口頭表現

自分の意見を効果的に伝えるために，スピーチ，ディスカッション，プレゼンテーションの仕方を学習した。具体的には，学習者が関心のあるニュース・トピックについて，情報を整理し，伝達する活動を行なった。また，それを踏まえてディスカッションも行なった。プレゼンテーションの実践では，発表の表現・質疑応答の仕方を学び，レジュメ・スライドを作成した

工学系（私費）・文章表現

大学生活で必要な文章表現技術に関して協働活動を通して学習した。メールによる連絡・依頼文の作成，簡単な機械の使い方マニュアルなどの説明文の書き方，資料を活用した意見文などを書く練習を行った。また，レポートを作成するために必要なアウトラインの立て方，引用・要約の仕方，レジュメの作成など基本的技能を段階的に学習した。

工学系（私費）・口頭表現

1）自分の経験について，3分間スピーチを行った。スピーカーが録音・文字化したものをもとに，自己評価・他者評価を行った。2）スライドを活用したプレゼンテーションの実践を通して，発表及び質疑応答の仕方を学んだ。テーマ設定から評価基準の設定まで協働的な活動を重視した。3）NHK の番組「プロフェッショナル仕事の流儀」「クローズアップ現代」を教材とし，視聴した内容をまとめて話す活動を行った。

1年後期

文系・文章表現

学習者が自分自身の関心に沿ってテーマを決め，必要な資料を収集し，レジュメ・レポートを作成するという活動を複数回行なった。一連の活動において，グループでの検討・修正を行ない，自己修正できるようになることを目指した。また，前期で学習した内容を踏まえ，より高度な引用･要約の練習，意見文の作成，図表の説明を行なった。

文系・口頭表現

「仕事」「子育て」「結婚」「介護」をテーマとした新聞

記事などを読んだ後，その内容を元にディスカッション・ディベート・プレゼンテーションを行った。授業では，新聞記事に用いられている語彙や表現のうち，上記の活動で使用可能な表現を取り上げ，練習した。また，各活動の後には，「役立ちそうな表現」「自分の話し方の利点･欠点」「その活動の際に大切だと思うこと」について記述させ，学期末に振り返りを行った。

理系・文章表現

実際の科学技術論文を読み，その中で使われる書式や表現を学習した。また，語彙・表現を増やす目的で学習者の関心のある書籍を多く読み，それに関するレジュメやレポート作成を実際に行った。文章の要約や引用の仕方，図表の作り方やその説明など，レポート作成のための文章を書く練習をおこなった。

理系・口頭表現

前期に引き続き，談話をわかりやすくする構造的条件を考えながら，より魅力的に話す練習をした。さまざまな分野について，広く，日本との関係も考えながら，自らの文化，社会を紹介できるように，自国のことばで書かれた自国（と日本の関係についての）資料を日本語に翻訳し，それを暗記して話し，ディスカッションをするという練習も行った。

工学系（国費）・文章表現

さらに高度な文章表現能力の養成を目的に，図表の説明・引用・レポートの書き方を学び，レポートを２回作成・発表した。個人作業で，段階毎に発表・討論も行い，１回目はグループ作業で，コピペ防止と分析力養成のため，図表を分析して，２回目は図表以外の文書資料も読んで書いた。どちらもテーマは自由とした。学習態度により出来栄えにも個人差が大きかった。

工学系（国費）・口頭表現

大学生活，とくに，学会やクラスでのプレゼンテーションにおいてスムーズで魅力的な口頭表現ができるようになるための練習をした。いくつかのトピックを話す場合に，同じトピックのものをまとめて話すグルーピング，トピックをまとめたものを最初に話すラベリング，どの順序で話すかというオーダリングを考えて話す練習をした。比較，対照によってわかりやすくする方法なども学んだ。

工学系（私費）・文章表現

学習者が自分自身の関心に沿ってテーマを決め，必要な資料を収集し，レジュメ・レポートを作成するという活動を複数回行なった。一連の活動において，グループでの検討・修正を行ない，自己修正できるようになることを目指した。また，より高度な引用・要約の練習，意見文の作成，図表の説明を行なった。

工学系（私費）・口頭表現

１）受講生の希望するテーマで討論を行い，討論後自分の意見をまとめて書くことを課題とした。２）自分で選択した新聞記事を題材に３分間スピーチを行った。スピーカーが録音・文字化をしたものをもとに，自己評価･他者評価を行った。３）NHK の番組を素材とし，視聴した内容をまとめて話す活動を行った。４）授業外の課題として現代小説を一冊読み切ることを課し，授業で報告会を行なった。５）川柳の鑑賞と作成を行った。

２年前期

文系・文章表現

日本社会・日本文化に関する文献等を読み理解を深めるとともに，レポートや卒業論文に必要な論理的な文章の書き方を学んだ。小学校での英語教育導入，大学生の就職活動をめぐる問題の中からテーマを選び，資料を読みながら，アウトラインと序文を作成した

２年後期

文系・文章表現

前期で学んだ内容をふまえ，より高度な読解力，文章表現力の向上を目指した。要約と引用の方法を中心に学び，興味のある本の内容を紹介するレポートを作成した。ここ数年話題となった新書を十数冊準備し，選んでもらった。

授業アンケートの結果

例年のように，授業終了時に行われたアンケート結果では，ほぼ全項目において非常に高い評価を得た。主な項目を下に示す。（４点満点）

・この授業はシラバス等で説明された授業目標や評価方法に沿って行われましたか（3.7）

・この授業に意欲的・自発的に取り組むことができましたか（3.6）
・この授業で設定された学習内容を理解できましたか（3.8）
・担当教員の熱意や工夫を感じましたか（3.8）

短期留学生日本語プログラム　2016年度

石　﨑　俊　子

１．2016年度の概要

短期留学生は日本語プログラムを受講することで単位取得が可能である。2016年度においては，１日１コマの「標準日本語コース（SJ コース）」７レベル，１日２コマの「集中日本語コース（IJ コース）」４レベル，「漢字コース」２科目，「入門講義」４科目に加え，「ビジネス日本語」４科目，アカデミック日本語８科目において単位認定を行った。

このうち，標準日本語コースの初級レベル（SJ101，SJ102）と集中日本語コースの初級～初中級レベル（IJ111，IJ112）においては，総合的な日本語能力を身につけるために，週５日出席すること義務づけている。SJ101，SJ102は１日１コマ・週５コマ・全70コマのコースであり，これらのコースを修了した学生には５単位を認定している。また，IJ111，IJ112は１日２コマ・週10コマ・全140コマのコースであり，これらを修了した学生には10単位を認定している。

SJ200以上のレベル，及びIJ211以上のレベルの学生は，レベルやニーズに合わせて文法・談話，読解，聴解，会話，作文のクラスを技能別に登録することが可能である。学生は１科目から最大５科目まで履修登録することができる。また，技能習熟度に合わせて配置されたレベルよりも下のレベルのクラスを登録することも可能である。ただし，２レベルで同じ名称の科目を登録することは認めていない。またSJ コースとIJ コースの科目を両方取ることはできない。SJ コースに登録した学生はSJ コースの科目のみ，IJ コースに登録した学生はIJ コースの科目のみ履修することができる。コース修了時，SJ においては１科目１単位を，IJ コースにおいては１科目２単位を認定している。

「漢字コース」は「漢字1000」「漢字2000」を開講しそれぞれ１単位を認定している。

以上の「標準日本語コース」，「集中日本語コース（IJ コース）」，「漢字コース」の詳細に関しては全学向けプログラムの報告を参照いただきたい。

上記に加え，日本語能力試験Ｎ２，または旧日本語能力試験２旧合格者に対しては，春学期，秋学期それぞれ４科目開講している入門講義の受講も認め，１科目につき２単位を認定している。

また，グローバル30プログラムの学生を対象に開講されているビジネス日本語に加えてアカデミック日本語４科目も短期留学生が受講した場合，１科目1.5単位を認定している。

２．成績評価

2013年度より出席率を成績認定の評価項目には原則として組み込まず，「修了認定基準」でのみ取り扱うことになっている。これに準じて成績認定基準の表記が一部変更となり，成績評価は100点満点中60点以上であるが，出席率が80％以下の者に対してはF* と記すことになった。

表１　成績認定基準

成績	成績評価（100点満点）
A*	100-90
A	89-80
B	79-70
C	69-60
F	59以下
F*	60点以上であるが，出席率が80％以下
W	履修取り下げ

３．登録状況

表２は春学期と秋学期の標準日本語コース，表３は集中日本語コースの登録者数を示したものである。全体の登録者数は春学期には短期留学生の76％に相当する117名中97名（異なり数）が，秋学期においては100％に相当する146名中146名（異なり数）が日本語を受講している。2015年度には，春学期には84％，秋学期においては89％の受講率であったので，2016年度は秋学期の登録者数が大変多かったと言える。

一方，受講者の延べ人数でみると，標準日本語コー

スの受講生が春学期に190名，秋学期に240名となっている。2015年度の春学期214名，秋学期183名と比較すると春学期の人数は減っているが秋学期は大幅に増加している。一方，集中日本語コースの受講生は春学期に81名，秋学期に146名となっている。この数は2015年度の春学期89名，秋学期97名と比較すると秋学期が大幅に増加している。

又，過去４年間の日本語の授業のクラス別登録者数の推移を比較してみた。（表４と表５参照）

・全体的に秋学期は春学期に比べて登録者数が1.5倍ほど多い。特にSJ101，漢字1000のクラスは年々大幅に増加している。SJ101においては日本語以外の専門の勉強を主としているが，折角日本に来たから少し日本語も勉強してみたいという学生が増えているのが原因である。
・SJ102からSJ202はこの４年間，春，秋ともに５人以下の登録者数で安定している。人数が少ないのでクラスの構成を見直したほうが良いと考える。
・漢字1000は秋学期，漢字2000は春学期に爆発的に登録者数が増える。今後，２つのクラスに分けたほうが良いと思われる。
・ビジネスやアカデミック日本語の登録者はSJクラスより多くなってきている。近年専門科目を受講する学生が増えており，午前中に授業のあるSJコースはクラスが重なって受講できないケースが多い。従って，５限以降に開講されるビジネスやアカデミック日本語を受講する学生が増えてきていると思われる。

表2　標準日本語コースの登録者数

	春学期	秋学期
SJ101	7	20
SJ102	5	3
SJ200会話１＆２	3	8
SJ200読解	1	7
SJ200聴解	3	6
SJ200文法・談話	3	7
SJ201会話１＆２	2	8
SJ201読解	4	4
SJ201聴解	2	3
SJ201文法・談話	4	4
SJ202会話１＆２	7	7
SJ202読解	7	6
SJ202聴解	8	6
SJ202文法・談話	5	10
SJ300会話１	9	3
SJ300会話２	8	2
SJ300読解	7	4
SJ300聴解	7	3
SJ300文法・談話	4	2
SJ301会話	3	7
SJ301読解	7	7
SJ301聴解	4	7
SJ301作文Ⅰ	6	9
SJ301作文Ⅱ	4	7
漢字1000	5	16
漢字2000	17	13
ビジネス１		12
ビジネス２	8	
ビジネス３		13
ビジネス４	13	
アカデミック（聴解･発表）１		11
アカデミック（聴解･発表）２	7	
アカデミック（聴解･発表）３		11
アカデミック（聴解･発表）４	7	
アカデミック（読解･作文）１		7
アカデミック（読解･作文）２	6	
アカデミック（読解･作文）３		15
アカデミック（読解･作文）４	7	
	190	240

表3　集中日本語コースの登録者数

	春学期	秋学期
IJ111	10	15
IJ112	5	12
IJ211会話１＆２	9	13
IJ211読解	8	13
IJ211聴解	9	13
IJ211文法・談話	10	13
IJ212会話１	6	13
IJ212会話２	6	14
IJ212読解	6	13
IJ212聴解	5	13
IJ212文法・談話	7	14
	81	146

表４　過去４年間の春学期登録者数比較

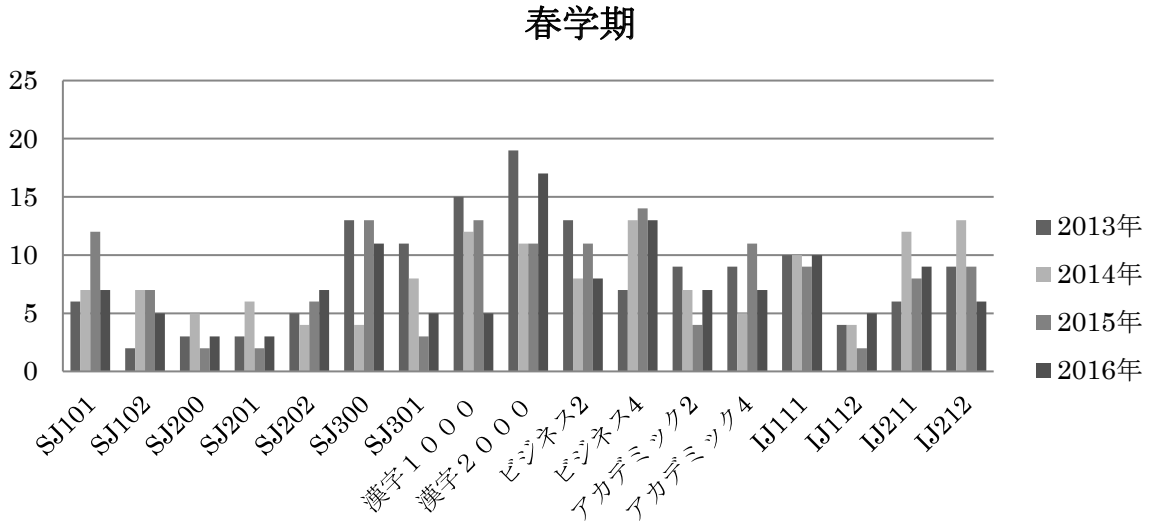
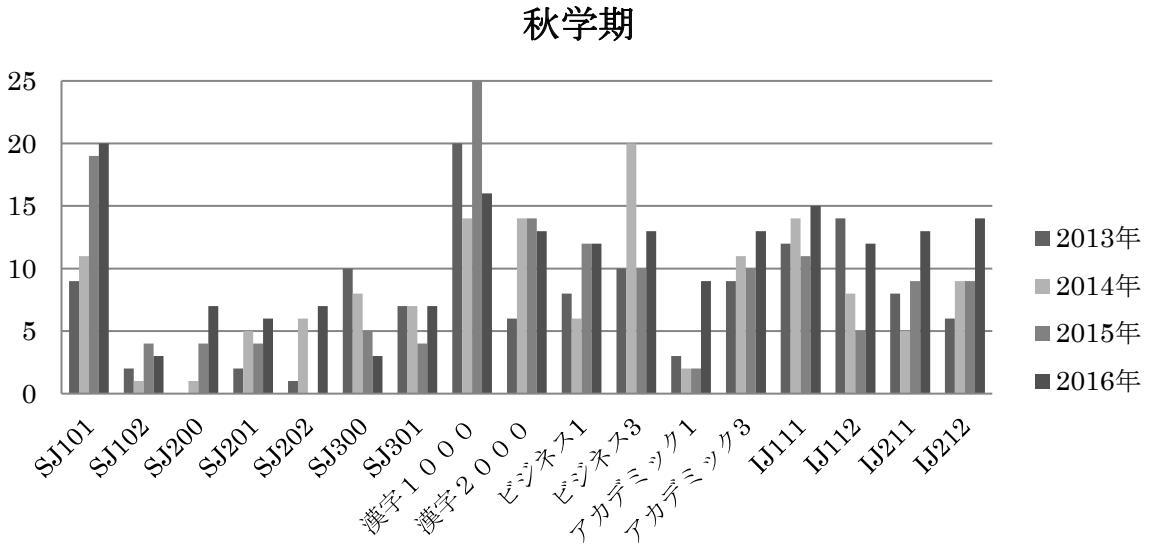


表５　過去４年間の秋学期登録者数比較



今後の課題

現在は全学と一緒にNUPACEの学生も受講しているので上記の人数＋20人というクラスも存在している。しかしながら，2018年春から全学の日本語クラスとNUPACEの日本語のクラスを分けて，NUPACE単独の日本語クラスを開講する予定をしているので過去の推移を参考にしてクラス編成を行っていきたいと考えている。

第17期　日韓共同理工系学部留学生予備教育コース

俵　山　雄　司

１．コースの概要

このコースでは，1998年の日韓共同宣言で提言された「21世紀に向けた新たな日韓パートナーシップ」に基づき発足した「日韓共同理工系学部留学生事業」により配置された韓国人留学生に対し，学部入学前の予備教育として日本語教育などを提供している。

コースの目的は，以下の３つである。（括弧内は，目的に対応する科目名）

(1) 工学部入学後の勉学や生活に役立つ日本語運用能力を養成する（会話，聴解，作文，読解，文法，漢字・語彙，応用会話，テーマ学習）。

(2) 日本文化に対する理解を深める（日本事情，全学教育科目「留学生と日本―異文化を通しての日本理解―」）

(3) 専門教育の土台となる基礎知識を確認する（物理，化学，数学）

第17期となる今期は，平成28年９月29日から29年３月１日までの約６か月（実質18週）間，７名の学生を対象に開講された。

２．カリキュラム

(1) 科目内容

・会話：主にキャンパス内で出会う場面を想定して，特定の目的のある対面会話について，コミュニーションの摩擦や挫折を生じさせることなく行う力を養成する。週３コマ。『現代日本語コース中級Ⅰ，Ⅱ』（名古屋大学出版会）使用。

・作文：「読み手」を意識した文章が書けるようになること，日本語のライティングの形式的なルールを守って書けるようになることを目指す。週２コマ。『Good Writingへのパスポート 読み手と構成を意識した日本語ライティング』（くろしお出版）使用。

・聴解：一般的な専門性の高くない話題の発表を聞いて，視覚資料があれば発表の重要なポイントが理解できる力，自分の興味のある話題について，事前に準備を行えば５分程度のプレゼンテーションをすることができる力などを養成する。週１コマ。『留学生のためのアカデミック・ジャパニーズ聴解［中上級］』（スリーエーネットワーク）使用。

・読解：日本語で書かれた様々な文章を読み，理解する能力を身につける。週１コマ。『改訂版大学･大学院　留学生の日本語１　読解編』（アルク）使用。

・文法：これまでに学んだ文法事項を体系的に整理し，復習する。週１コマ。『現代日本語コース中級Ⅰ，Ⅱ』（名古屋大学出版会）使用。

・漢字・語彙：上級・超級レベルの漢字を覚え，使うことができるようになること，類義語・対義語・コロケーションを学び，使えるようになることを目指す。週１コマ。『上級･超級日本語学習者のための考える漢字・語彙』（ココ出版）使用。

・応用会話：教室の外の様々な場面で，これまで勉強した or いま勉強している日本語を実際に使いながら，さらに応用できる力（表現力，聞き取り力，質問力など）を養う。週１コマ。自作教材使用。

・テーマ学習：身近な社会問題に関する番組を見て，取り上げられている問題の主要な点を理解することができる力，また，それについて，自分の意見を述べたりクラスメートと意見交換したりすることができる力などを養成する。週１コマ。自作教材使用

・日本事情：これから日本で生活していく上で必要な文化的・社会的理解を深め，日本の社会や身の周りの環境に慣れる。週１コマ。自作教材使用。

・「留学生と日本」：外国人留学生と日本人学生が討論や共同作業を通じて，日本社会や日本文化に対する理解と相互の理解を深める。週１コマ。自作教材使用。

・物理・化学・数学：専門教育の土台となる基礎知識を確認するとともに，その知識を日本語と結び付ける。各週１コマ。自作教材使用。

(2) レポート作成と発表会

２月に入ってから，各自が選んだテーマに基づき資料を収集し，報告レポートを作成した。２月21日(火)には，工学部の担当教員・日本語教育担当教員・本コースの先輩学生を招いて，レポート発表会を行った。テーマは，「リニアモーターカー」「インタネット回線」「タバコの害と喫煙者の意識」「RFID について」「バーチャルリアリティ」「クラウドファンディング」「ステルス技術の概念と活用について」であった。

(3) 評価

９月29日（木）に日本語診断テスト（聴解，漢字，文法・表現，読解から構成）を行い，各科目の内容や進度を検討した。コース内の評価として，各科目において，筆記試験・口頭試験などの各種テスト，プレゼンテーション・振り返りなどの各種活動を実施した。２月22日（水）には修了試験を行った。これは，診断テストと同レベルの試験で，コースを通しての日本語能力の伸びを測った。

３．今期の特徴と今後の課題

今期の特徴としては，以下の２点が挙げられる。

・第16期からみられた，学生の来日時の日本語能力の高さに対応するため，作文，聴解，漢字・語彙のメイン教材を変更した。

・昨年度開催の協議会で韓国側からの要望として出た「会話･作文といった産出面への注力」に対応するため，昨年は週３コマだった聴解を１コマに減らし，その分を作文(従来の１コマから２コマに増)，テーマ学習(新設)に回した。また，聴解でも聞き取った内容を説明する活動の割合を増やすなどした。この効果は，文章作成，特に，最終課題の報告レポートで顕著に見られ，構成意識の高まりやメタ言語的表現への習熟により，読みやすく論旨の明解なレポートが増加した。

今期は，科目名にとらわれることなく，各科目内で，複数の技能を統合した，より実生活での言語行動に近づけた活動の試みが増加した。今後も，このような活動を，継続し，また，組織化していくことを目指したい。

日本語教育メディア・システムの開発

石　﨑　俊　子　・　佐　藤　弘　毅

１．オンライン日本語コースの運営

今年度のオンラインコースの履修状況は以下の通りであった。登録者数は履修登録を行った人の数を、受講者数は一度でもオンラインコースにアクセスした人の数を、修了者数は各コースの修了要件を満たした人の数である。

【オンライン読解・作文コース】

前期	登録者数：14	後期	登録者数：36
	受講者数：２		受講者数：９
	修了者数：１		修了者数：１

2016年度オンライン読解･作文コースの修了者数(14課中10課以上60％以上の成績）は前期１名、後期１名であった。

【オンライン漢字コース】

前期	登録者数：21	後期	登録者数：15
	受講者数：５		受講者数：５
	修了者数：０		修了者数：２

2016年度オンライン漢字コースの修了者数（10課中80％以上の成績）は前期０名、後期２名であった。

各期各コース共に例年並みの10数名以上の履修登録者がおり、コースに対するニーズは依然として高いことが伺える。一方で登録はしたものの実際にオンラインコースを続ける人は少ないという傾向も例年通りである。これは、研究などの活動を続けながら各自のペースで日本語を勉強するためにオンラインコースに受講登録したものの、実際には忙しくてなかなかコースにアクセスする時間が取れないものと推察される。一方で最後までオンラインコースを利用した受講者に話を聞いてみると「忙しい研究や専門の勉強の合間に気軽に日本語の勉強ができたのでありがたい」という声もある。履修登録者数の多さも踏まえると、たとえ最後までコースを続けられなくとも受講者が自分のペースでいつでも学習できる環境が用意されていることに意味があると考えられるので、今後も引き続きオンラインコースを運営していきたいと考えている。

資　　料

歴代国際言語センター長
平成28年度　国際言語センター専任教員
平成28年度　日本語コースの担当者
平成28年度　大学院・学部授業担当および学位論文審査
国際言語センター教員研究業績
国際言語センター主催研究会記録
国際言語センター全学委員会委員
国際言語センター沿革

歴代国際言語センター長

留学生センター

初代	馬越　徹	1993年４月～1995年３月
第二代	石田　眞	1995年４月～1999年３月
第三代	塚越　規弘	1999年４月～2001年３月
第四代	末松　良一	2001年４月～2005年３月
第五代	江崎　光男	2005年４月～2007年３月
第六代	石田　幸男	2007年４月～2011年３月
第七代	町田　健	2011年４月～2013年９月

国際言語センター

初　代	福田　眞人	2013年10月～2017年３月

平成28年度　国際言語センター専任教員

センター長　　福田眞人（2013年10月～2017年3月）

日本語・日本文化教育部門

教　授	籾山　洋介
教　授	浮葉　正親
教　授	衣川　隆生
准教授	石﨑　俊子
准教授	李　澤熊
准教授	佐藤　弘毅
准教授	俵山　雄司
講　師	永澤　斉

英語教育部門

特任教授	FISCHER Berthold（兼任）
特任教授	BUTKO Peter（兼任）
特任准教授	WOJDYLO John Andrew（兼任）
特任准教授	VASSILEVA Maria Nikolaeva（兼任）

平成28年度　日本語コースの担当者

１．日本語研修　コース

〈４月期：第74期〉

衣川　隆生　　高橋　伸子
佐藤　弘毅　　安井　澄江
魚住　友子　　松木　玲子
大羽かおり　　久野伊津子

〈10月期：第75期〉

衣川　隆生　　高橋　伸子
佐藤　弘毅　　安井　澄江
魚住　友子　　松木　玲子
大羽かおり　　久野伊津子

２．日本語・日本文化研修コース

〈2015年10月～2016年９月：第35期〉

籾山　洋介　　向井　淑子
永澤　　済　　松岡みゆき
中川　康子　　石川　公子
西田　瑞生

３．教養科目「留学生と日本ー異文化を通しての日本理解」

渡部　留美　　浮葉　正親
高木ひとみ　　中島美奈子

４．全学向け日本語コース

〈前期〉

李　　澤熊　　椿　由紀子
浮葉　正親　　西田　瑞生
石﨑　俊子　　安井　澄江
籾山　洋介　　大羽かおり
佐藤　弘毅　　服部　　淳
衣川　隆生　　松木　玲子
俵山　雄司　　中川　康子
永澤　　済　　向井　淑子
徳弘　康代　　加藤　　淳
石川　公子　　安井　朱美
久野伊津子　　國澤　里美
宗林　由佳　　田中　典子
高橋　伸子　　近藤三紀子
高安　葉子　　豊田　早苗
嶽　　逸子　　呉　　禧受

〈後期〉

李　　澤熊　　椿　由紀子
浮葉　正親　　西田　瑞生
石﨑　俊子　　安井　澄江
籾山　洋介　　大羽かおり
佐藤　弘毅　　服部　　淳
衣川　隆生　　松木　玲子
俵山　雄司　　中川　康子
永澤　　済　　向井　淑子
徳弘　康代　　加藤　　淳
石川　公子　　安井　朱美
久野伊津子　　國澤　里美
宗林　由佳　　田中　典子
高橋　伸子　　近藤三紀子
高安　葉子　　豊田　早苗
嶽　　逸子　　呉　　禧受

５．学部留学生を対象とする言語文化科目〈日本語〉

〈前期〉

浮葉　正親　　鷲見　幸美
俵山　雄司　　西田　瑞生
魚住　友子　　國澤　里美

〈後期〉

浮葉　正親　　鷲見　幸美
俵山　雄司　　西田　瑞生
魚住　友子　　國澤　里美

６．日韓理工系学部留学生日本語プログラム

〈2016年10月～2017年３月〉

俵山　雄司　　近藤　行人
李　　澤熊　　西坂　祥平
石﨑　俊子　　梶原　彩子
千葉　月香　　木村あずさ
ソル　ヘソン

平成28年度　授業担当および学位論文審査

Ⅰ．授業担当（大学院・教養教育院・NUPACE）

１．大学院

国際言語文化研究科

籾山洋介：現代日本語学概論ａ（前期１コマ　２単位）
現代日本語学概論ｂ（後期１コマ　２単位）
李　澤熊：日本語文法論ａ　（前期１コマ　２単位）
日本語文法論ｂ　（後期１コマ　２単位）
村上京子：日本語教育評価論ａ（前期１コマ　２単位）
日本語教育評価論ｂ（後期１コマ　２単位）
衣川隆生：日本語教育方法論概説ａ
（前期１コマ　２単位）
日本語教育方法論概説ｂ
（後期１コマ　２単位）
石﨑俊子：コンピューター支援日本語教育方法論ａ
（前期１コマ　２単位）
コンピューター支援日本語教育方法論ｂ
（後期１コマ　２単位）
佐藤弘毅：日本語教育工学ａ　（前期１コマ　２単位）
日本語教育工学ｂ　（前期１コマ　２単位）
永澤　斉：日本語語彙論ａ　（前期１コマ　２単位）
日本語語彙論ｂ　（後期１コマ　２単位）
浮葉正親：日韓比較文化論ａ　（前期１コマ　２単位）
日韓比較文化論ｂ　（後期１コマ　２単位）

文学研究科

籾山洋介：理論言語学ａ　（前期１コマ　２単位）
理論言語学ｂ　（後期１コマ　２単位）

２．教養教育院

浮葉正親：基礎セミナーＡ「韓流ドラマから『パッチギ』まで―日韓比較文化論のすすめ」
（前期１コマ　２単位）
浮葉正親・渡部留美・高木ひとみ・中島美奈子
：全学教養科目「留学生と日本－異文化を通しての日本理解」（後期１コマ　２単位）
佐藤弘毅：全学教養科目「情報リテラシー（文系）」
（前期１コマ　２単位）
俵山雄司：全学基礎科目「言語文化Ⅰ日本語１」
（前期１コマ　1.5単位）
俵山雄司：全学基礎科目「言語文化Ⅰ日本語２」
（後期１コマ　1.5単位）
浮葉正親：全学基礎科目「言語文化Ⅰ日本語１」
（前期１コマ　1.5単位）
浮葉正親：全学基礎科目「言語文化Ⅰ日本語１」
（後期１コマ　1.5単位）
浮葉正親：全学基礎科目「言語文化Ⅱ日本語１」
（前期１コマ　２単位）
浮葉正親：全学基礎科目「言語文化Ⅱ日本語２」
（後期１コマ　２単位）

３．名古屋大学短期交換留学プログラム（NUPACE）

籾山洋介：入門講義「言語学１」
（秋学期１コマ　２単位）
籾山洋介：入門講義「言語学２」
（春学期１コマ　２単位）
浮葉正親：入門講義「日本文化論１」
（秋学期１コマ　２単位）
浮葉正親：入門講義「日本文化論２」
（春学期１コマ　２単位）
李　澤熊：入門講義「日本語学１」
（秋学期１コマ　２単位）
李　澤熊：入門講義「日本語学２」
（春学期１コマ　２単位）
徳弘康代（国際教育交流センター）
：入門講義「日本文学１」
（秋学期１コマ　２単位）
徳弘康代（国際教育交流センター）
：入門講義「日本文学２」
（春学期１コマ　２単位）

Ⅱ．学位（博士）論文審査

○浮葉正親（副査）

論文提出者：朴雪梅（国際言語文化研究科）

提 出 論 文：清末における在日中国人女子留学生の出版活動

○籾山洋介（副査）

論文提出者：高橋暦（国際言語文化研究科）

提 出 論 文：〈実現〉を表す視覚動詞「みる」の認知言語学的研究
—コーパスに基づくアプローチ—

平成28年度　国際言語センター教員研究業績

李澤熊

論文

１）李澤熊（2016.7）「日韓対照言語研－多義的別義の認定をめぐって－」『日本認知言語学会論文集』16巻，pp.518－523，日本認知言語学会 .

２）李澤熊（2016.10）「『決まる』と『決める』の意味分析」『言語文化論集』第38巻１号，pp.17－29，名古屋大学大学院国際言語文化研究科 .

３）李澤熊（2017.2）「『かえる』と『かえす』の意味分析－日本語教育の観点から－」『言語文化論集』第38巻２号，pp.3－18，名古屋大学大学院国際言語文化研究科 .

４）李澤熊（2017.3）「動詞『ひく』の意味分析－日本語教育の観点から－」『名古屋大学日本語・日本文化論集』第24号，pp.1－25，名古屋大学国際言語センター .

講演

１）李澤熊（2016）「外国語に対する恐れと自信」『BUFSグローバルチャレンジャー』特別講演，９月，於釜山外国語大学（韓国）.

口頭発表

１）李澤熊（2016）「『決まる』と『決める』の多義構造－日本語教育の観点から－」日本語教育学会研究集会第２回，６月，於愛知県立大学 .

２）李澤熊（2016）「日本語と韓国語の比較」韓国語講師研修会，８月，於長野韓国教育院 .

その他

１）李澤熊（2017.1）「返る」『基本動詞ハンドブック』，「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性 プロジェクト」国立国語研究所（http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/）.

石﨑俊子

教材開発

１） 反転授業のための映像教材（2016）
http://opal.ecis.nagoya-u.ac.jp/~jems/hanten/index.html

発表

１） 石﨑俊子（2017）,「反転授業を取り入れた日本語の授業－ CinJ を例に」，BATJ sig IT Japanese CinJ 研究会，８月，於ダラム大学

浮葉正親

研究報告

１）浮葉正親（2016）「応答せよ1988」『季刊はぬるはうす』第49号，NPO 法人ハヌルハウス，48－50頁

２）浮葉正親（2016）「無等山の麓にて」『季刊はぬるはうす』第50号，NPO 法人ハヌルハウス，41－43頁

３）浮葉正親（2016）「ソウル，巫俗の世界のさらなる深みへ」『季刊はぬるはうす』第51号，NPO 法人ハヌルハウス，41－45頁

４）浮葉正親（2017）「ソウルの村祭りと老万神との出会い」『季刊はぬるはうす』第52号，NPO 法人ハヌルハウス，54－57頁

発表

１）浮葉正親（2016）「金沢が創造都市になった理由」第19回晋州仮面劇フェスティバル学術シンポジウム「晋州，創造都市を夢見る」，韓国・慶尚大学校，2016年５月27日（韓国語）

衣川隆生

論文

１）宮島良子・衣川隆生・金村久美・佐藤綾（2016）「日本語教育の社会実装に向けた日本語教員の役割－多分野との連携事例から見えてくること－」『2016年日本語教育学会（ひめぎんホール，2016, 10, 8）予稿集』，pp.52－63.

２）近藤行人・西坂祥平・衣川隆生（2017）「専門講義理解支援のための説明活動－対話を通じた学習者の理解の変容－」『日本語教育方法研究会会誌』，Vol.23, No.２, pp.98－99.

佐藤弘毅

著書

1）The Effect of Question Styles and Methods in Quizzes Using Mobile Devices, Pena-Ayala, Alejandro（Ed.）Mobile, Ubiquitous, and Pervasive Learning: Fundaments, Applications, and Trends, Advances in Intelligent Systems and Computing, Vol. 406, pp.1-22（2016）（Kitazawa, T., Akahori, K. と共著）

発表

1）佐藤弘毅（2017） 電子黒板を使用した授業において「教師が見える」ことによる効果に関する実験的検討，教育システム情報学会研究報告，Vol.31, No.6, pp.75－82 （単著）

獲得した外部資金・研究費

1）研究代表
高度に情報化された教室環境における初級日本語教育用教材の要件分析，日本学術振興会科学研究費補助金 （挑戦的萌芽研究） （2016－2019）

2）研究分担
巨大壁面電子黒板と携帯端末を利用した大学講義のインタラクティブ化に関する研究，日本学術振興会科学研究費補助金 （基盤研究（B）） （2015－2019）
（研究代表者：柳沢昌義 （東洋英和女学院大学））

俵山雄司

論文

1）俵山雄司・渡部真由美・田中真寿美（2017）「地域日本語教育における日本語ボランティアの養成・研修講座の内容の変遷―文化庁事業の平成20年度と平成25年度の取組の比較を通して―」『名古屋大学日本語・日本文化論集』24号，pp.45－59，名古屋大学国際言語センター

発表

1）望月雄介・俵山雄司（2016）「語りの談話に出現する名詞における不確実性―中国人日本語学習者と日本語母語話者の比較―」日本語／日本語教育研究会第８回研究大会，2016年10月２日，学習院女子大学

2）俵山雄司（2016）「資料へのコメント場面におけるコメントの受け手の言語行動」第７回談話分析コロキアム，2016年12月23日，山形テルサ

永澤　済

論文

1）永澤済（2017）「複合動詞「V おく」の用法とその衰退」『名古屋大学日本語・日本文化論集』第24号，pp.27－44，名古屋大学国際言語センター

2）永澤済（2016）「判決における漢語動詞の特殊用法―「X と Y とを離婚する」をめぐって― 」『言語文化論集』第38巻１号，pp.39－50，名古屋大学大学院国際言語文化研究科

3）永澤済（2016）「近代民事判決文書の口語化―ある裁判官の先駆的試み―」『東京大学言語学論集』第37号，本文：pp.147－160，別表・資料：pp.e55－68（電子版），東京大学言語学研究室

口頭発表

1）永澤済（2017）「日本語史研究における実用文書資料の可能性―和化漢文の分析を例に―」国際日本文化研究センター共同研究会，１月，於国際日本文化研究センター

2）永澤済（2016）「近代から現代日本語へ―転換の諸相―」現代日本語学研究会（第159回），５月，於名古屋大学

籾山洋介

編書

1）山梨正明・吉村公宏・堀江薫・籾山洋介［編］（2016）『認知語用論』（認知日本語学講座　第５巻），くろしお出版

論文

1）籾山洋介 （2016）「多義語の多様性：典型的な多義語と単義語寄りの多義語」，『日本認知言語学会論文集』16，pp.512－517，日本認知言語学会

2）籾山洋介 （2016）「ステレオタイプの認知意味論」，山梨正明他（編）『認知言語学論考』13，pp.71－105，ひつじ書房

書評

1）籾山洋介 （2016）「渡部学著『日本語のディスコースと意味―概念化とフレームの意味論』」，『日本語の研究』12- 4，日本語学会

研究発表

１）籾山洋介　(2017)「百科事典的意味の諸相」(招待講演)，NINJAL（国立国語研究所）コロキウム・講演会（第77回)，2017年２月28日，於国立国語研究所

２）籾山洋介　(2017)「フレーム・現象素・メトニミーをめぐって」，現代日本語学研究会（第166回)，2017年３月25日，於名古屋大学

その他

１）籾山洋介（2016)『基本動詞ハンドブック』WEB版

（http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/)，国立国語研究所・共同プロジェクト「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性（基本動詞ハンドブック作成チーム)」［校閲担当語「する」「やる」「決める」「決まる」「言う」「なる」「つく」「つける」「張る」「持つ」「返る」］

平成28年度　国際言語センター研究会記録

教員による研究会

現代日本語学研究会

（関係教員：籾山洋介／李澤熊／永澤済）

「現代日本語学研究会」は，籾山洋介を世話人として，1994年３月に始まったものである。また，2003年４月より，李澤熊が事務局を担当し，研究会の運営に尽力している。研究会は2017年３月現在で166回開催されている。参加者は毎回15～30人程度である。

本研究会は現代日本語を研究対象とし（日本語と他言語との対照研究を含む），「意味論」「文法論」「語用論」等の分野で研究を行っている研究者（教員，大学院生等）の集まりである。ただし，参加者の研究の枠組みは多岐にわたり，理論志向の研究者も記述志向の研究者もいる。また，認知言語学を専攻する者も生成文法の研究者もいる。参加資格は，原則として，（近い将来）研究発表が可能な者とし，研究の水準は修士論文以上を目安としているが，学部レベルの参加者もいる。

2016年度に開催された研究会は以下の通りである。

第159回
2016年５月７日
発 表 者：永澤　済（名古屋大学）
発表題目：近代から現代日本語へ―転換の諸相―

第160回
2016年６月４日
第１発表：滝　理江（名古屋大学大学院【院】）
発表題目：多義語としての助詞「なんか」の意味分析
第２発表：山本幸一（名古屋大学【非】）
発表題目：Tough構文及び名詞と動詞の意味変化―メトニミーの２タイプの分析から―

第161回
2016年７月30日
第１発表：山本幸一（名古屋大学【非】）
発表題目：プロファイル／アクティブゾーン不一致現象とプロファイル／レファラント不一致現象－ tough 構文の分析に向けて－
第２発表：ミン　ソラ（名古屋大学大学院【院】）
発表題目：カテゴリーの周辺例を明示する表現に見られるカテゴリー化―「ぎりぎり X（である）」を中心に―
第３発表：栗木久美（名古屋大学大学院【院】）
発表題目：形容詞「深い」の意味拡張の動機づけ

第162回
2016年９月24日
発 表 者：野田　大志（東北学院大学）
発表題目：現代日本語における動詞「ある」の多義構造

第163回
2016年10月29日
発 表 者：小川朱美（名古屋大学大学院【院】）
発表題目：「水に囲まれる状態」を表す動詞の意味分析―「のまれる」と「ながされる」―

第164回
2016年11月26日
発 表 者：山田裕子（名古屋大学大学院【院】）
発表題目：文末表現「～ものか」の意味の分析

第165回
2016年12月23日
発 表 者：有薗智美（名古屋学院大学）
発表題目：［手＋形容詞･形容動詞］における「手」の内実的意味―行為のフレームに基づくメトニミーを中心に―

第166回
2017年３月25日
発 表 者：籾山　洋介（名古屋大学）
発表題目：フレーム・現象素・メトニミーをめぐって

平成28年度　国際言語センター全学委員会委員

平成28年国際機構全学委員会委員

（平成28年4月～）

委　員　会　名	国際言語センター	任期	期　　間
国際機構会議	センター長		５号委員
国際交流委員会	衣川　隆生	２年	平成28年４月１日～平成30年３月31日
国際教育運営委員会	衣川　隆生		平成27年４月１日～平成29年３月31日
交換留学実施委員会	石﨑　俊子		５号委員
全学教育企画委員会	浮葉　正親	２年	平成28年４月１日～平成30年３月31日
附属図書館商議委員会 オブザーバー	佐藤　弘毅	２年	平成28年４月１日～平成30年３月31日
情報セキュリティ組織連絡協議会	佐藤　弘毅		
全学同窓会幹事会	李　澤熊		
こすもす保育園運営協議会	石﨑　俊子	２年	平成28年４月１日～平成30年３月31日
災害対策室会議	衣川　隆生		平成25年４月１日～平成26年３月31日
教養教育院統括部 言語文化科目部会	浮葉　正親	１年	平成25年４月１日～平成26年３月31日
名古屋大学スペース・コラボレーション・システム事業委員会　全学教育棟子局運営委員会	佐藤　弘毅	１年	平成25年４月１日～平成26年３月31日

平成28年度　国際言語センター内部委員会委員

（平成28年4月～）

委員会名	部会・WG	国際言語センター
総務委員会	特昇 WG	衣川
財務・施設委員会	経理・整備 WG	李・衣川
	情報セキュリティ WG （両センター合同）	佐藤
	安全・防災部会 （両センター合同）	衣川・永澤・石﨑
広報委員会	広報・紀要部会	浮葉・李・佐藤
	ホームページ部会	石﨑
	日本語・日本文化論集編集部会	籾山・浮葉

国際言語センター沿革

	日本語・日本文化教育部門	日本語教育メディア・システム開発部門
1977	語学センターが非常勤講師による外国人留学生のための日本語教育を開始	
1978	専任講師着任,「全学向け日本語講座」授業開始	
1979	語学センターと教養外国語系列が総合され，総合言語センター発足 総合言語センターの１部門として「日本語学科」設置 「日本語研修コース」開講	
1981	「日本語・日本文化研修コース」開講	
1984	教養部在籍留学生対象一般教育外国語科目「日本語」開講	
1991	総合言語センターが言語文化部に改組。それに伴い一般教育外国語科目「日本語」は言語文化科目「日本語」として開講される	
1993. 4	学内共同教育研究施設として,「留学生センター」設置 (「日本語・日本文化教育部門」・「指導相談部門」の２部門体制)	
	留学生センターとして，これまで通り「全学向け日本語講座」「日本語研修コース」「日本語・日本文化研修コース」言語文化科目「日本語」を開講	
1994. 4	留学生センター研修生規定が定められ,（1994.2),研修生の受け入れ開始	
1996. 4	短期留学生対象日本語授業開始	
1998. 4	インターネットによるWebCMJのオンライン開始	
1999. 4		「日本語教育メディア･システム開発部門」発足（留学生センター４部門体制となる）
8		担当助教授着任（ハリソン）
2000. 4		二人目の担当助教授着任（大野）
2001. 3	留学生センター新棟完成	
2003. 3	教授１名退任（藤原）	
4	講師１名採用（李）	
2004. 2		助教授１名転任（ハリソン）
3	助教授１名退任（神田）	
4		WebCMJ多言語版開発 オンライン読解・作文コース開始
11		助教授１名採用（石﨑）
2005. 3		助教授１名転任（大野）

	日本語・日本文化教育部門	日本語教育メディア・システム開発部門
4	日本語プログラムの再編成 １）全学日本語プログラム（集中コース，標準コース，漢字コース，入門講義，オンライン日本語コース） ２）特別日本語プログラム（初級日本語特別プログラム，上級日本語特別プログラム，学部留学生向け日本語授業，日韓理工系学部留学生プログラム）	教授１名日本語・日本文化教育部門から配置換え（村上） オンライン漢字コース開始
5	留学生センターホームページ改訂	
6	講師１名採用（佐藤）	
2006. 3	教授１名転任（尾崎）	
4	助教授１名採用（衣川）	現代日本語コース中級聴解 CD-ROM 開発
5	教授１名昇任（籾山）	
10		現代日本語コース中級聴解 Web 開発
2007. 2		現代日本語コース中級聴解 Web 課金開始
6	准教授１名昇任（李）	
2008. 3		JEMS オンライン日本語教育ポータルサイト開発
2009. 11	特任准教授１名着任（初鹿野：国際交流協推進本部）	
2010. 2	特任准教授１名着任（徳弘：国際交流協推進本部）	
2011. 3		TNe とよた日本語 e ラーニング会話編（市役所，病院，学校）完成 TNe とよた日本語 e ラーニング文字編（ひらがな，カタカナ，履歴書）完成
2012. 3		WebCMJ 多言語版完成（17言語） 「名古屋大学日本語コース中級Ⅰ＆Ⅱ」オンライン及びデジタル版の開発 TNeとよた日本語eラーニング会話編５カ国版完成 TNeとよた日本語eラーニング文字編５カ国版完成
2013. 4	教授２名昇任（浮葉，衣川）	
10	国際交流協力推進本部改編に伴い，留学生センター日本語･日本文化教育部門及び日本語教育メディア･システム開発部門は，「国際言語センター」に改組（「日本語・日本文化教育部門」･「英語教育部門」の２部門体制）。	
2014. 4	准教授１名昇任（佐藤）	
2015. 2	国際言語センターホームページ改訂	
3	教授１名定年退職（村上）	
4	准教授１名採用（俵山）	
2016. 2	G30日本語教育担当教員２名「国際教育交流センターへ配置換え」	
3	教授１名定年退職（鹿島）	
4	講師１名採用（永澤）	

編集後記

国際言語センターになって４年が過ぎ、大室剛志先生（人文学研究科教授）を新たなセンター長に迎えた。また、その間に相次いで定年退職した２人の教員の後任も着任し、スタッフが若返った。また、非常勤のスタッフにもかつての留学生センター時代を知らない人が徐々に増えている。夏休みを迎えようとしている現在、来年度から始まる新しい日本語プログラムの準備が急ピッチで進められている。過去の蓄積にしがみつくことなく、捨てるものは捨て、新たなビジョンを生み出していかなければならない。組織改編後５年目に入り、国際言語センターは目下、「断捨離」中というか、モデルチェンジの真っ最中である。さまざまな声が聞こえてくるが、前に進むしかない。暑い夏になりそうだ。

（MU）

名古屋大学国際機構
国際言語センター年報　第４号

2017年８月31日　印刷・発行

〒464－8601　名古屋市千種区不老町
編集者　名古屋大学国際機構
　　国際言語センター
電 話〈052〉７８９－２１９８
FAX　　７８９－５１００
印刷所　株式会社　荒 川 印 刷
　　名古屋市中区千代田２－16－38
　　電話〈052〉２６２－１００６

Nagoya University Institute of International Education & Exchange

International Language Center
Annual Report　Vol. 4